

# インターカルチャー

## INTERCULTURE

NO. 101

2005年10月号  
OCTOBER



■■ 学校法人 千里国際学園 Senri International School Foundation (SISF) ■■

千里国際学園中等部・高等部 Senri International School (SIS) 併設 大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS)  
〒562-0032 箕面市小野原西4丁目4番16号 TEL 072-727-5050 FAX 072-727-5055 URL <http://www.senri.ed.jp>

オーストラリアホームステイ  
サマーキャンプ  
留学報告  
夏の諸活動報告  
英検1級に3名合格  
囲碁全国大会出場



生徒デザインによる新しいスクールバス

# 発明家藤村靖之さん

大迫弘和

SIS校長

発明家という仕事をしている方とゆっくりとお話しをしたのは初めてでした。藤村靖之さんのお話を伺っていると「私は発明家ですから」というフレーズがよく出てきます。藤村さんにとって発明家とは、いい人が困っていると発明で何とかしてあげる、そのような仕事をする人で(今、世界ではいい人たちが困りすぎている、と藤村さんは言います)、実際藤村さんはモンゴルの遊牧民のために非電化冷蔵庫や羊乳殺菌装置を作ってあげたり、水が悪いため多くの乳幼児が水因性疾病で死亡しているナイジェリアでは簡易浄水(殺菌)器でこどものいのちを助けることをしたりしているのです。いつも柔和な表情で優しい言葉遣いされる藤村さんの中には、ものすごいエネルギーがみなぎっています。

藤村さんはご自身のお子さんの喘息を治そうと発明家の道を選ばれ「会社一恵まれた立場から収入ゼロの起業家」に転じました。実際藤村さんの発明した空気清浄機はご自身のお子さんのみならずたくさんの方の喘息で苦しむ子どもたちを救っています。

それでも藤村さんからは、いわゆる「りきみ」のようなものは一切感じられません。

「私は電気が悪い、非電化がいい、だから非電化を使いなさい、などということはいいたくもないし、言ってもいけません。『楽しいと思う方を選んだらいい』というのが私の提案です。」

そのような藤村さんが、2005年5月1日に、本校にいらっしゃってくださいました。夏に彩都の里山で「いのち」「いきる」という名のプロジェクトを実行しようとしていた本校の生徒たちに、発明家として、力を貸してくださるためでした。

3階会議室で藤村さんはこんなお話をしてくださいました。

「本当の感動には三つのことが必要です。自主的(自ら進んで取り組むこと)に、主体的(誰かに任せるのではなく自

分が中心になって)に、そして創造的(新しい何かを生み出すこと)に。」

その日一日を本校で過ごされた藤村さんはすっかりSISのこと、SISの生徒たちのことを気にいってください、その後この8月、「いのち」「いきる」のプログラムが無事終了するまで、何度もお住まいの神奈川県から大阪に足を運んでくださり、生徒たちを助けて下さいました。

出会い、ということについてふたつのことを考えました。

ひとつは「本物」との出会い。

生徒たちは「本物」と出会うことによって、大きく成長していきます。だから出来るだけそのような機会を作ってあげたい。藤村さんと話すときのSIS生徒の目は「本物」と向き合っている輝きに満ちていました。

もうひとつは出会いを求める心を常に持つこと。

私たちは、やはり努力しないと、自分と同質の、ある意味居心地のよい仲間とだけ時間を過ごすことになってしまいがちです。同一言語、同一文化を持った人といふことは勿論とても容易なことです。しかし、それでは、豊かな生の可能性に自ら蓋をしているような生き方だと言えるように思えます。SISという国際学校で学ぶ生徒たちには、自己と異なる他者との出会いを積極的に切り開いていてもらいたい。それこそが国際学校で学ぶ意味であり、「国際性」というものの具体的形ではないでしょうか。同じ言葉・文化・考え方の人とだけお付き合いするモノトーンな生き方を選ぶのではなく、異なる言葉・文化・考え方の人と出会い、そして「どのようにしたらうまくお付き合いできるか」をいろいろな経験から学ぶこと。国際学校で生徒を育てる教員は、そのモデルを生徒たちに示す役割もありそうです。

校長という外部との接点になる仕事の性質上、様々な方々と出会う機会には恵

まれているように思っていますが、藤村さんのような方との出会いは、その中でもとても嬉しく、楽しくまた勉強になります。

藤村さんにとってもSISという学校、そしてSIS生徒たちとの出会いはとても幸福なことのように思えます。

もうひとつ藤村さんが「出会った」ものがありました。

「大迫先生、日本の教育もまだまだまんざら捨てたもんじゃありませんね。」

8月21日、彩都里山の今年のフィナーレ「里山家族 circle of life」に来てくださった藤村さんにこれまでのお礼を申し上げた私に、藤村さんはそのように言ってくださいました。

「ほら、あんなすばらしい先生がいるならね。本当にすばらしい先生ですね。生徒の自主性、主体性を徹底的に尊重しながら、安全面も含め、見てあげなくてはいけないところにはしっかりと目を配っていらっしゃる。本当に感動します。すばらしい、いや、本当にすばらしい先生だ。」

藤村さんの視線の先には、里山で、夏の強い日差しの中、いつものこやかな笑顔を失わず、生徒と一緒に汗を流し頑張っていた田中守先生の姿がありました。

## 千里国際学園基本方針

千里国際学園では、自分の行動に責任を持ち、よい人間関係を維持していく能力が、生徒各自に備わっていると信じます。この考えにもとづいて、次のような行動の目安がつけられています。

### < 5つのリスペクト >

- 自分を大切にする
- 他の人を大切にする
- 学習を大切にする
- 環境を大切にする
- リーダーシップを大切にする

# オーストラリアホームステイ

土佐礼子

理科

9年生30名が参加しました。中村先生、水口先生のご指導のもと、春学期間を通じて事前学習や交流会などの準備をし、不安と期待の入り混じった気持ちでブリスベンに向けて飛び立ちました。・・・そして3週間後、冷え込む未明、見送りに来てくださったホストファミリーとの別れを惜しみつつ、オリオンが大きく輝く夜空のもと帰国の途に着きました。

受け入れてくださったホストファミリー、サンドゲイト高校、ネラングバ高校の先生方、また送り出して下さった保護者、多くの方々の支援を得て、みなそれぞれ貴重な経験ができました。文集から小澤悠君と阿部真夕さんのレポートを紹介します。

小澤悠(Sandgate District State High School)

ローバインからサンドゲイト高校までの道のりでやはり一番感じていたことは緊張と期待でした。事前学習会で見たビデオレターの中で、人の良さそうな話し方でしたが、実際にはどうなのかなという不安がありました。途中でネラングバ高校につき、友達がパートナーに直面している姿を見て余計に不安が押し寄せてくるのを感じました。その後30分程度でサンドゲイトにつきました。バスを降りた瞬間先生から報告されたことを聞いて驚きました。用事があるので来なかったみたいなのです。その日は結局、春名みつる君のホストファミリーの家に一日泊めていただくことになりました。正直「なんていい加減なホストファミリーなんだ」と緊張を裏切られたような気がしてなりません。その次の日に僕のホストファミリーがみつる君の家に迎えに来ました。ホストファミリーとしゃべってみて思ったことは、本当にいい家族だということです。学校に通い始めてからも、家族みんながいつも気にかけてくれました。最初のいい加減だと思っていた自分が恥ずかしくなりました。もちろん自分は英語が少しできるということもありますが、いつもホストファミ

リーのおかげでコミュニケーションがとれていたと思います。帰るときには、メモリー、アルバム、英語版のハリポッターまでプレゼントしていただき、本当にいい家族だったと思います。

昨年は夏休みに中国に行きましたが、中国とはまた違うカルチャーショックを受けました。オーストラリアの人は全体的に日本人みたいにきっちり物事をすまさないといけないという堅苦しい考えは少ないほうで、意外にいい加減だったりします。家でも度々家族の誰かがトイレを流していないこともありましたが、学校でも時間どりに授業に行っている生徒も少なかったです。また、オーストラリアの人は非常にフレンドリーで、一度喋ったらすぐに友達になることができました。友達と別れたときは本当に寂しかったです。やっぱり旅行ではなく、ホームステイや留学は本当に人生面でいい経験になると改めて実感しました。すばらしい三週間を過ごせたと思います。阿部真夕(Nerangba Valley State High School)

私は二つ目の家族に出会うことができました。この出会いができて千里国際学園の生徒になったことを嬉しく思います。私のホストファミリーはすごく良い人達で私に本当の家族のように接してくれたので、ホームシックにかかることなく楽しい毎日を過ごすことができました。家では毎日のようにバディーのJessicaとAliciaが喧嘩してて、はじめはどうすれば良いか分からなくて困って下を向いていたけど、最後には仲裁に入っていけるほど姉妹にもとけこめました。私は一番年下なので、妹ができたみたいですごく嬉しかった。お母さんのRoxyはすごく面白い人で楽しかった。Roxyは日本料理が好きで、私は巻き寿司と肉じゃがと味噌汁を作ったりRoxyもたくさんの料



理を私に教えてくれました。でも三日目の夜、肉じゃがを作ったときに火が強すぎて汁がふきこぼれ、煙が出て火災報知機が鳴って、あんまり台所には入れてもらえなかった。お父さんのDavidはとてもユニークで笑いが絶えませんでした。また、いろいろなことを教えてくれてすごくてめになった。海に行ったときもずっと運転してくれて日本では見れないすばらしい景色がたくさん見れました。初めは一番怖くて話にくい存在だったけど、最後にはよく話せて良かった。おじいさんのFranklはお別れの時にオーストラリアの鳥を作ってプレゼントしてくれて感動しました。おばあさんのNana(本当の名前はMary)は遊びに行くたびにMIL0を作ってくれた。Nanaは、名前とコアラとカンガルーとエミューをタオルに刺繍をしてくれてすごく嬉しかった。私のホストファミリーは潤のホストファミリーと仲良く、潤のバディーのTimやお姉さんのRebeccaやお母さんからとても良くしていただいた。学校で授業を理解できるか心配だったけど、なんとなくだけど分かってホッとした。特にMs.Kayは私達にすごく気配りしてくれてとても感謝しています。学校の先生や友達、ホストファミリーは私の拙い英語を一生懸命聞いてくれて嬉しかった。初めは行くのが不安だったオーストラリアも今では住みたいと思うほどです。

私をこのホームステイに行かせてくれた両親、私を受け入れてくれたオーストラリアの人達、この機会を与えて下さった学校、このホームステイを見守って下さった先生方に言葉では表すことができないほどの感謝をしています。

## <2005サマーキャンプ報告> 森のキャンプ

田中 守

理科

森のキャンプは、茨木市の里山を舞台に、2泊3日の日程で実施しました。そこは設備の整ったキャンプ場ではなく、何も無い所から生徒みんなで作り上げてきた手作りキャンプ場です。高等部の生徒（レンジャー）が中等部のキャンプを運営するプログラムでもあります。レンジャーたちは1ヶ月前から準備を進めてきました。天気は雨。3日間降り続けました。ずぶぬれ、どろどろ……。でも参加したみんなが楽しめたキャンプでした。今年学んだこと……「雨のキャンプも面白い！雨なんて怖くない。」手作りのテントはしっかり雨を防いでくれました。交代で作った手作りの食事はどれもおいしかった。自分たちで作った森の遊びはすごくおもしろかった。あっという間の3日間でした。保護者のお父さんお母さんも参加してくださり、森の木々の間を駆け抜けるロープウエイも作ってくださいました。以下にリーダーをしてくれた12年李利奈さんの文章を紹介しします。

～森の自然体験キャンプ・レンジャー経験の最終章を迎えて～

李 利奈

高等部3年

高校1年生の夏、初めて体験した「森の自然体験キャンプ」の「フォレストレンジャー」。あの感動からはや2年もの月日が流れ、今年の夏ついに高校生活において、また私の人生において最後のフォレストレンジャーを迎えた。今年もまた、彩都山での本番前のプレキャンプ



協力してくださった保護者の皆さん(+レンジャー)

(準備だけの山入り)を含めた実質4日間の森のキャンプは、最終的に「キャンプは愛！」(笑)という今年独特のテーマを掲げてゆく中、悪天候であったものの沢山の人の協力のもと、無事にキャンププログラムを遂行してゆくことができた。

私は今年のレンジャー活動を通して、「キャンプ運営」という立場において、レンジャー全体を取りまとめる役割に当たる「マネージメントディレクター」としての仕事を体験した。いわゆる、運営スタッフの中でもキャンプ全体を「裏から支える」という極めて重要、且つ私にとっては挑戦的な役割を任せられたのである。これを受けて、私は今までのレンジャー経験から得てきた自信を胸に、この役割にしっかりと、自身の積極性を活かしながら務めてゆきたいと決意し、そして「キャンプ作り」を楽しもうという思いを忘れずに、6月からの1ヶ月間、レンジャー活動に挑んだのである。

今年のレンジャー構成は、約18名。例年に比べて少なかったことで、私自身も「キャンプが出来上がるのか。」と不安だったが、実際活動を進めるにつれて、レンジャー一人ひとりの仕事に対する姿勢が熱く、そして意欲的になっていった。そんな中でも、今年のレンジャー活動に参加した、12年生は私を含め3人で、各自、キャンプ運営における様々な役割を与えられ、3人でキャンプ全体の統率を執ってゆくというものであった。私は自分に与えられた役割としてすべき事、

またそれと平行にしてキャンプの運営をしてゆくことの難しさを知った。しかし今までにレンジャーとして味わったことのないほどの厚い壁に悩んだことで、私自身またそこから多くの学びを得ることができたのである。1ヶ月間の放課後30分ミーティングを毎日進めることに始まり、自分の所属する「マネージメント」(食事やプログラム全ての備品担当などを行う)でのリーダー、そして



キャンプを統率してゆく立場として、私が今年の森のキャンプの中で果たすべき役割を、試行錯誤を繰り返しながら、私自身に求められるリーダー像やリーダーシップは何なのか、と模索していった。正直レンジャー3年目にして「リーダー」というものにここまで深い壁を感じたことはなかった。しかし今年、私はレンジャー活動を通して、仲間と組織をまとめる真のリーダーシップの要素を見出せたことで、本当に貴重で心に残るレンジャー経験となった。

キャンプ当日、天候が全日雨だったのに加え、その影響で各プログラムの大幅な変更があったのにもかかわらず、キャンプ全体が温かく進行してゆけたのは、まさしくそこにレンジャー同士の信頼関係、そしてキャンパーの笑顔があったからだと思う。

私にとってかけがえのないフォレストキャンプ活動。「リーダーシップ」というものに初めて厚い壁を感じ、もがき苦しみながらも仲間と1つのものを作り上げるという過程の中で得たものの大きさは計り知れない。レンジャー活動経験から得た教訓を今後、私が携わるあらゆる活動に活かしてゆきたいと思うと同時に、千里国際学園におけるこの森のキャンプ・レンジャー活動に出会えたことを、今心から嬉しく思う。

最後になりましたが、三年間、キャンプ活動を多大な力で支えてくれた沢山の先生方どうもありがとうございました。そして不安ながらも共に汗を流し、私を支えてくれたレンジャーの皆、どうもありがとうございます！そして本当にお疲れさまでした。

# 海洋キャンプ

失敗は成功の元

牧野 良

高等部3年

今年の海洋キャンプ全体リーダーだった牧野良です。あいにくの雨が続き、予定がかなり変わってしまったキャンプとなってしまいましたが楽しかったでしょうか？風がなくてヨットが出来なかったり、なかなかゆっくりと遊ぶ時間がなかったりと大変でしたが、そんな中でも、お互いをカヤックからひっくり返して何回も落とし合ったり（お陰で私は体中あざだらけでした 笑）、カヌーを四人で力をあわせてこいだり、鯛めしと豚汁を作ったり、石にペイントしたり、肝試しで本



当に怖い思いをしたりと、充実した四日間を過ごせた事と思います。12年生にもなると、7年生や8年生の子とコンタクトを取る機会がほとんどなくなってしまいうので、キャンプを通してMSの子達と友達になれてとても嬉しかったし、海洋キャンプの目的の一つである「MSとHSの親睦を深めること」がしっかりと達成された最高のキャンプでした。しかし、今年ここまで満足する事が出来た裏側には、「去年の失敗を繰り返さない」と心に決めた事を書かずにはいられません。

私は、今年で海洋キャンプのリーダーを務めるのは二回目となります。二回やるに至った理由は、もちろんやっていると楽しいからというのがありますが、去年の自分の失敗、そしてHSメンバー全体の失敗から得た反省を存分に活かして、最高のキャンプを作り上げるためというのが一番大きい理由でした。私は、去年初めて海洋キャンプのリーダーになったため、全く要領が分からず、リーダーがしっかりと各アクティビティの進行状況の確認やスケジュール打ち合わせをキャンプ場の人たちとしていくべきなのに、それらを怠ってしまい、キャンパーやHSメンバーをかなり混乱させてしまう結果となりました。また、HSメンバーまでもがキャンパー化してしまい、HSならばMSの手本となって基本的なルールは守るべきなのに、それが出来ていませんでした。また、キャンプの目的

「MSとHSの親睦を深めること」を達成しようとせず、HSとMSに分かれて遊んだり、活動したりしてしまいました。これらの問題が発生したらすぐに対処するべきだったのに、それが出来なかった私のリード不足に問題があったと感じ、深く反省しました。

そのため、今年は各アクティビティの係の人たちが何をやっているのか、そのアクティビティには何が必要なのかをしっかりと把握するよう、また、キャンプ場のスタッフの人とも頻りに打ち合わせをし、スケジュールの流れを把握して、キャンパーに的確な指示を与えるように努めました。また、私以外にも、去年同じ思いを抱いて今年も海洋キャンプメンバーになる事を決めた人もいたため、去年に比べてかなりHSメンバーのやる気を感じ、しっかりとグループをまとめあげてくれました。また、今年はグループの枠を超えて、HSとMSの仲がとても良かった印象を受けました。更に、去年と大きく違った事は、HSもMSもそれぞれが積極的に仕事を引き受けてくれ、「これやるよ!」、「何か仕事ないですか?」と私のもとに聞きに来てくれる人がたくさんいたことです。雨が降ったり、スケジュールが狂ったりしても、大きな混乱もなくやりとげられたのは、このような一人一人の協力があってからで、私一人では決して出来ませんでした。

今年のキャンプは、私のS I S生活最

後のキャンプとして満足のいく、最高のものとなりました。そして、このキャンプを通じて、リーダーはしんどいアクティビティの時に、いくら自分がしんどくても励ましてあげて、なるべく楽しい思い出にしてあげなければいけないこと、常に明るく良い雰囲気作りに努めなければいけないことなど、リーダーのありべき姿を見出す事が出来ました。また、反省を活かして更に良いものを作っていく大切さを知りました。正に、今回のキャンプで「失敗は成功の元」ということわざが実証されたわけです。次は、これを読んでいるMSの皆さんが素敵なリーダーとなり、このことわざを活かして更に良いキャンプを作っていかけてくれることを願います。

最後に、このキャンプに参加して盛り上げてくれたMSの皆、マリナーズとして立派に働き、こんな私のもとでできばきと動いてくれたHSの皆、YMCAの関さん、そして引率の中尾先生、相良先生、野島先生、森先生など、海洋キャンプに関わった皆さんに深く感謝しています。本当にありがとうございました。

# 写真文芸長作成キャンプ

斉藤 数

理科

今回のキャンプは、今までになく中学生が多く参加しました。中学生は、目に映ったものそのままをダイレクトに撮影するであろうし、高校生は、心に映ったものをどのようにして撮るか考え、その位置が決まったところで始めてシャッターを押します。中学・高校生の写真視点の違い、また、写真に文章や詩、短歌などをつけていくのですが、使う言葉やその表現方法も中学生と高校生とではずいぶん違うでしょう。アルバムに仕上がったとき、その辺を見ながら作品を鑑賞していくことが楽しみでした。

撮影旅行の方は、とても変化の多い天候に恵まれて(!)、いろいろな状況の下で撮影ができました。生徒も傘を突き抜けてくるほどの雨脚の中で、それをマイナスととらず、その中で普段と違った変化のある風景の中にシャッターチャンスを探して、よくパチパチと撮っていました。そんな姿を見て、「これが写真を撮る基本の姿だ」と大いに満足するとともに、出来上りの写真が楽しみでした。小雨に煙る夜の古都の中で、また、早起きし、小川を散歩する人々をスナップする生徒も多くいました。移動のときすらも、しゃれたお店があるとパチパチ、こっちのウィンドウの古物をパチパチという風でした。撮影地は岡山の小京都・津山と倉敷です。性格の異なる町を撮り歩き、空気の違いを肌で感じ、体も心も被写体に正面向きの旅でした。

翌日からの学校での活動は、これまた精力的で、文芸誌の作成やパワーポイントを使っての音楽入りの紀行映画の作成と、みなフル回転でした。その甲斐あって、満足のいく作品が作れました。一人ひとり出来上がった100ページ以上の文芸帳を手にし、笑いっぱいでした。

木村典子先生・山本靖子先生・伊藤史織先生、最初から最後まですべてに亘って有難うございました。おかげさまで、生徒一人ひとり思い出に残るキャンプが出来ました。

生徒からの感想を抜粋します。

\* 津山は、霧が深く、昔のまま残してある家が多くてびっくりしました。・・

川が氾濫していて、すごかったです。

\* 初日はあいにくの雨でしたが、面白かったです。

\* 好きな写真を好きなだけ撮れてよかったです。

\* 最初は不安だったけど、なかなか上手く撮れました。

\* 写真を撮るのが大好きな私ですが、この旅はめちゃ×2楽しませてもらいました。1日目

の雨のときに写真が撮れて、普通なら撮れないようなところを雨のしずくとともに撮れてしずい写真が初めて撮れました。

\* 特に思い出に残ったのが、商店街を歩き、食べ物を食べたり、写真を撮ったりなどする行動が、私にとっては、思い出深いです。

\* 行きたいところを(みんなで)決めて、そこへ行くということが、とってもうれしかったです。希望の場所へ行くことができてもっと嬉しかったです。

\* 1日目は雨が降ってたからつらかったけど、植物がイキイキして私もイキイキしました。

\* このキャンプはキャンプでなく「旅」でした。津山は、町全体が古きよき時代を演出していました。・・見知らぬ町で自由に行動することは最初は不安でしたが、楽しみながらゆっくり余裕を持って、散策することができました。

\* このようにじっくり風景に触れて、その空間を楽しむのも、また新しい旅の楽しみ方とも思いました。たった1泊2日でしたが、とても満足できるものでした。

\* たくさん歩いて、疲れた。

\* 5日(倉敷)の朝に撮った写真は、大阪では撮れないものばかりだったし、友達に見せたら「すごくよく撮れてる」と言ってくれたので、すごくうれしかったです。

\* 古い日本家屋に泊まれてよかった。

\* (撮影した場所は、)予想より全然いい所だった。それに、いっぱい写真を撮ったし、ずっと記憶に残っていくと思う。

\* 圧倒的に犬の写真が多くなったけ



ど・・すごく楽しかった。

\* 雨の日でこそ撮れた写真もいっぱいあった。

\* 雨が降っていて、みながびしょぬれになって必死に写真を撮っている姿が印象的でした。雨のおかげで、普段見ない色彩が見れて、良かったのではないかと思います。・・・オルゴールは、華麗だけど寂しげなものだなと思いました。

\* いきなりデジカメが壊れたり...。雨上がりの風景がとてもきれいで、ある意味雨が降って良かったです。

\* このキャンプでしか撮れないだろうというほどの大量の写真を撮りました。一人では「写真を撮りに出掛けよう」なんて思わないので、写真を撮るのが好きな仲間たちと皆で撮影の旅に出るのは、とても楽しかったです。・・おいしいご飯、雨にぬれた植物など、良い思い出です。

\* いったん撮り始めるともう撮るのが楽しくて、のめりこむ様にはまってしまって、自分でも驚いています。様々な角度から...

\* 自分としては、上出来と思われる写真がたくさん撮れたので良かったです。

\* 上級生の人たちが優しくしてくれて、安心できました。チボリ公園の乗り物も楽しかったです。(写真を撮ることがメインでしたが...) いつもよりいい写真が撮れたと思いましたし、いい場所にいられてよかったです。

\* いい作品が撮れたと思います。

出来上がった文芸帳は、紀行映画のCD入りで図書館にありますので、どうぞご覧になってください。

# 心の旅

青山比呂乃

図書館

今年の「心の旅」は、11年5名、12年11名、引率2名の18名で7月4日から7日までの3泊4日で行って来ました。仏教の真言宗の総本山である高野山は昨年度の「心の旅」の最中に世界遺産に登録が決めたので、その後観光客が増えたりして、雰囲気は変化していないか、ちょっと心配でした。しかし、歩道が整備されていたり、お手洗いが外国人観光客でも使いやすくなっていたり、という細やかな心遣いを感じさせる変化はあったものの、全体としての落ち着いた町のたたずまいは変わらず、今年もゆったりとした気分浸って丸3日を過ごすことができました。

今回も、数々のお寺に参拝し、阿字観という禅宗の座禅にあたる瞑想法や般若心経の写経、護摩供養や勤行に励み、さらにオプションでお経を唱えながらの自分だけの数珠作りに挑戦した人もいました。以下は、2年連続参加した人に紹介を書いてもらったので、ご覧ください。

王 麻美

高等部3年

この旅は、とにかくゆったりした自由な時間を過ごすことが出来る旅です。自分を見つめ直したい、心を安らげてみたいと思うのなら参加してみてもいいのではないでしょうか？

旅を振り返ってみると・・・20万基を超える墓や供養塔が並ぶ奥の院を散策したり、諸堂拝観をしたりしましたが、印象に残っているのは阿字観や法話、語り合いです。阿字観の阿字とは宇宙を表す文字で、阿字観とは、仏様と大自然が一体であると体感する事です。この阿字観を朝夕に行い、旅の中で計6回しました。足がしびれて、なかなかつらいけれど上半身は心地良くて幾度となく眠ってしまったほどです。

法話は、ご住職・近藤大玄先生からしていただきました。人が自分をどう思っているのかなどと考え、悩むことはくだらない、無駄な事である、という言葉が一番心に残っています。例えば、恋をして好きな人がいれば、相手が自分をどう思っているか気になって、考えたり悩んだりします。けれど、そんな事をいつま



でも考えていたところで答えは出ない、つまり、くだらない事だとおっしゃるのです。確かに、わかるのですが、実際は考えてしまうものですよ・・・。まあ、このような面白くて、興味深いお話も色々して下さいますよ！今の話につっこみたい人やこの他にも聞きたい事柄がある人は、是非来年の夏、心の旅に参加してみて直接伺って下さい！

語り合いは、お坊さんや一緒にキャンプに参加した人とたっぷりしました。将来のことや今心に抱えている事など、長く語り合いました。語り合うというのは、この旅の醍醐味です！時間をあまり気にせず、自由に語り合ってみたい人や静かな空間を一人で堪能したい人は、行ってみるべし！！

最後になりましたが、引率してくださった、青山先生、松島先生、お世話になりました。ありがとうございました。

# チャレンジキャンプ

新見真人

理科

今年度の『夏のチャレンジ・キャンプ2005』では、メイン・プログラムを北アルプス白馬岳登山とし、S I S高等部生徒たち26名と井藤真由美先生、難波和彦先生、そして私（新見）の総勢29名で長野までの往復を貸切バスを利用して行ってきました。まず、青木湖で3グループ対抗の筏競争を行い、翌日には蓮華温泉（1475m）から白馬大池（2380m）へ、テント・食料・調理道具等を分担してリュックに詰めて、その重い荷物を担いでの登山をしました。白馬大池小屋前で自炊・テント泊。翌、早朝に食料・水・雨具を入れたデイパックの軽装備で、白

馬大池から小蓮華岳～三国境～白馬岳頂上（2932m）へ、頂上征服後、同じ道を引き返し、白馬大池に戻り、デイパックから重いリュックに背負い変え、蓮華温泉まで一気に下山して、ここでも自炊・テント泊をしました。（写真参照）。例年のごとく日本アウトワード・バウンド・スクール（OBS）長野校のプログラム・ディレクターの前田浩一（マエッチ）氏をはじめインストラクターの方々【敬称略：山田理砂（リサ）、平田紗智子（サッチン）、中村伸治（モンド）、吉田奈津子（ナツ）、河合宗寛（ムネ）、元木由紀（ユキ）】には本当にお世話になりまし



た。今度の筏・登山・テント泊などのチャレンジを通しての各自それぞれの達成感・充実感が、これからのあなたたちの一人一人の進路選択に当たっても、何かのきっかけを与え、今後のみなさんの人生の自信の源になることを願っています。しんどかったですね。ご苦労様でした。

# 100kmウォーク

岡本茉莉

国語科

夏休み初日の7月1日から7月4日まで、参加者10人と共に100kmウォークに行ってきました。一日につき約33km歩くのですが、一時間歩き続けても4kmほどしか進めません。朝八時ころに出発しても、宿に着くのは夕方の六時過ぎ。これを三日間繰り返すのですから、100kmは予想以上に遠い道のりでした。

生徒たちも最初は勢いよく走り出し走り続けていたのですが、日がたつにつれ、足や腰の痛みが大きくなっていきました。また、いつまでたってもゴールに近づかないという精神的な苦痛もあったと思います。それでも生徒たちはみんなで歌を歌ったり、クイズを出し合ったりして、お互いに励まし合っていました。最初は知らないもの同士だったみんなが、こうしてどんどん仲良くなっていく様子は見ていてとても嬉しかったです。

そして3日目の19時頃、ついにゴールする瞬間がやってきました。その時はずっと雨が降っていたのですが、もう濡れることもお構いなし。みんな水溜りも突っ切って、日本海が見えるゴールに向けてダッシュしました。生徒たちは傘も放り投げて、海に飛び込んでしまいそうな勢いでした。全員本当にずぶぬれになりましたが、みんな笑っていて、とても思い出に残る素敵な時間を共有しました。

「ただひたすら歩き続ける。」これは単純だけれどとても疲れる大変なことです。それを達成できたということは、今後大きな自信になると思います。歩いている最中は辛いことも多かっただろうけれど、大通りを外れた脇道にはさまざまな花が咲いていることや、よく見ると小さな蛙がたくさん隠れていること、休憩所で食べるチョコレートがあんなにもおいしいことなど、日常生活では忘れがちなことにもたくさん気付けたのではないのでしょうか。そういった一つ一つのことがきつとずっと忘れられない思い出になるはずですよ。

今回は完歩出来なかった人も、マネージャーとして一生懸命にみんなを支えてくれました。本当に一人ひとりがそれぞ



れの立場で自分の力を発揮してくれたと思います。みんなが、今の自分の力を出し切ることが出来た100kmウォークでした。

また、私自身も最初から最後までずっと生徒たちと一緒に歩かせていただき、一緒に行った先生方には本当に感謝しています。全体の指揮をとってくださった田中憲三先生（なんと、100km完歩されました！！）、車の運転や買出しなどをサポートしてくださった馬場先生、高橋先生、本当ににお疲れ様でした。最後に、参加した生徒の感想を幾つか掲げておきます。

「100kmはとてつもなく遠いです。最後、ゴールして、日本海の塩の味を味わったときには感動しました。」

「いつも自分との戦いだった！それに勝てた自分がここにいる！」

「あきらめずに最後まで歩ききることが出来たのは、これからの事に大きく影響するとみんな言っていました。努力が足りないと言われてきたので、強みになると思っています。」

「100km walk completed！最後まで歩き、初めて日本海を見れてとても満足感を得られました。良い思い出をありがとうございます！！」

「筋肉痛とかもあったけど、それを乗り越えてステップアップできたと思います。」

「この夏に100km完歩できてよかった。100kmも歩いたのだから、何か大きな力を身につけられたのではないかと思います。」

「すごく大変でした。ですが最高に楽しかったです。」

「初めての体験だったので良い経験になりました。」

「途中見つけたひまわり畑は綺麗だった。日本だと思えない光景で思わず立ち止まった。みんなお疲れ様！！」

「今年の夏一番の思い出になりました」

まだまだここには載せきれませんが、それぞれにとって貴重な体験になったようです。今回、このメンバーと一緒に歩けて良かったです。みんな本当ににお疲れ様でした！

# 国際交流農業キャンプ

真砂和典

理科

私がこのキャンプに参加するのはもう7回目だ。ほぼ毎年、一年に3日は農作業をしてきた。自分の全労働の1%以上を農業に費やしてきたことになる。ごく僅かだが、なんとなく心地よい。「消費者」の後ろめたさから少しだけ解放されるからだ。今年からこのキャンプを生徒に説明する時に、「キャンプというよりボランティアだ。」と言うことにした。「大災害が起こると生徒の中には、自分はこの間にのんびり暮らしていいのよ、現地に駆けつけて何かできることはないのかという切迫感を持つ人もいます。しかし、今はもっと人間としての実力をつけておかないと、どこに行ってもあまり役に立たないよ。しっかり勉強してください。でも、このボランティアから始めるのはいいかもしれないね。」と説明した。自分達の食事を作る時間よりも農作業を優先し、アジア学院(Asian Rural Institute)の人々と一緒にカフェテリアで食事をしながら交流を深めるように去年から変えた。これでこのキャンプはかなり完成に近づいたと思う。体力がもてば少し期間を延ばして4泊5日にするのもいいかなという考えもあるが...

今年は7年生から12年生までの11人の生徒、弥永先生と私の「集団帰農」であった。昔から変わらないのは、うちの生徒達が頼もしいということだ。生徒達は自分で選んで来ているので、辛い仕事も一生懸命やってくれる。引率者としても本当にうれしい。前向きな取り組みから多くを学んでいるだろう。今年、私の心に残る場面のひとつは、薄暗い掘っ立て小屋の中、上下40cm程の狭く、クモの巣が張っているたまねぎの棚に、激しい臭いもものともせず、上半身をつっこんで、束ねやすいたまねぎを集める12年生の青木光理さんの姿だ。「光理さんはもう次の段階に進む準備が十分にできていますね。」

アジア学院で撮った写真と6人が書いてくれた文章を学校のフォルダーに入れた。みんなが見られるようになるそうだ。その中からひとつを紹介しよう。

福井麻友子  
高等部2年

“国際農業キャンプ”というキャンプ名を聞くと、行った事のない人にはただ“国際の農業について学ぶキャンプ”と思われるかもしれないけれど、私はこのキャンプで多くの事を学びました。

一番強い印象を受けた事はshareをするという事の大切さです。これは日々のfarm workや食事、キャンパーとの会話やmorning gatheringなどから学ぶ事が出来ました。『自分が育てたから、自分だけ食べる』とか『自分の国ではこうだから、こうした方が一番良い』という考えは一切なし。一人一人が“生きる”という事の大切さを旨に、それぞれの考え方や恵みを分けて共に汗を流し、生活をしていくという事の大切さを強く実感しました。

次に言語があまり通じなくても、お互いの事を知れるという事です。私達が行った、アジア学院には様々な国から来たキャンパーが大勢いました。日本語はもちろん、英語も片言だったり、食べ物の食べ方が違ったり、目を疑うような光景もありました。でも皆、一生懸命気持ちを伝えようとしてくれて、文法をそっこのけで単語を組み合わせで喋ったり、身振り手振りで仕事内容を教えてくれたりしました。もちろん私も英語をペラペラと喋れないので、英語と日本語をミックスして話したりしました。それでも私はキャンパーが何を伝えようとしているのか分かったし、相手も私の事を分かってくれたと思います。

この3泊4日の間に、何人かのキャンパーと仲良くなれました。ミャンマーから来た明るくて面白いMyoさん、アフリカ



の事について色々教えてくれたMahoussiさん、ダッタ先生の事や日本の事に興味を持っていたインドから来たTetseoさん、毎日話すのに私の名前を覚えられなくて、最後は掌に名前をメモしてくれたインド人のTetseoさん、楽しく過ごせているか気にしてくれたインドネシアから来たVenyさん、バックグラウンドやブタの飼育方法を熱心に教えてくれたBiswalさんなど、本当に多くの人にお世話になりました。

とても短い期間だったけれど毎日、新しい発見を見つけて色々な事を身に付ける事が出来たと思います。暑期中、田んぼに入って雑草を抜き、目を閉じたいほど刺激的だった鶏のブッチャリング、毎朝ぎりぎりに行っていたラジオ体操、2トンものタマネギ縛り、ウグイス豆の栽培、子ブタを洗った事など、全てが忘れられない思い出です。今回の経験を、いつかどこかでいかしたいと思います。We love ARI!!

## &lt;留学報告&gt;

## アメリカで過ごした一年間

一階こころ

高等部2年

私は1年間アメリカのMissouri州にある人口約1600人の小さなSweet Springsという街に留学していました。もうまだ帰ってきて2ヶ月しか経っていないのに留学した事が今では夢の様です。でも一つ私が自信を持って言えることはこの留学は本当に私にとって濃く、意味のある1年間だったということです。どうして留学がしたかったかということ、お兄ちゃんが留学してとても楽しそうだったのと、もちろん私自身ももっと英語を上達させたかったし、そしてせつかくこの学校に入ったのだからもっと英語が喋れるようになり、さらに友達の幅を増やしたいと思ったからです。

ホストファミリーはこれまでに6人の日本人留学生をホストしたことがありなんとしかもその6人目が12年生の西田沙織さんだったのです。だから行く前にたくさん話しを聞き、どんな感じだったのかを聞けたりしました。ママはとにかくどんと来い！って感じの自分のヘア・ネイルサロンを営んでいるTina、警察官兼うちの街の消防士のチーフをしているこれまたがっしりとした体のTodd、そして2歳の純アメリカンという感じのめちゃうちゃかわいいCaitlinが私のホストファミリーです。もうホストするのは慣れているからなのか初対面から特に自己紹介もなくそのまま車に乗り込みました。そして1日しか休暇を得られないまま学校が始まってしまいました。ママにどんな事を話して友達を作るかなど色々アドバイスをもらい学校に着きました。かなり緊張して心臓バクバクでした。でもどんどん積極的にみんなに話しかけ、学校初日でたくさん友達を作ることが出来ました。彼氏いる？がなぜか一番打ち解けられるのが早かったので、みんなも試してみたいと思います。

Sweet SpringsはKansas city (heart of Americaと言われるまさにアメリカのド真ん中！)の近くにありますが、といっても行くのには車で1時間かかり

ます。cityまで行かないとモールがありません。街から見える風景といえば一面のとうもろこし畑と豆畑、牛に馬という感じでカントリーをかなり満喫することができます。もちろん学校も小さく私の学年は40人でした。みんなカントリーっ子という感じでカントリーミュージックを聴いていて私も好きになりました。

すぐに学校にもホストファミリーにも慣れ、良いスタートを切ることができました。リスニング力はすぐについたけれどなかなか自分の話をするのはまだとぎれとぎれになっていたのがもどかかったです。でもKatieに出会い、私の英語力は急速に上がっていったのです。私はバンドの授業をとり、クラリネットをしていて、そこで隣に座ったのがKatieです。特に話したわけでも無くそのときは普通にHiしか言葉を交わしませんでした。そして私がトイレに行った時Katieもいてベルトの話をしていてどうやらそれをthrift shopで1ドルで買ったという話しをしていたのでその話しに入り、そこからショッピングの話題になり二人とも買物好きという共通の趣味が見つかり、その週末cityへショッピングに行こうということになりました。そこから私とKatieは意気投合し、話もめちゃうちゃ合っってKatieといるとなぜか日本語で普通に喋っているように英語が出てきました。友達の力って凄いなぁと本当に感心しました。週末はほとんどKatieの家にお泊りをしていて、またそのKatieの家族が本当にいい人達だったので私は本当に幸せでした。みんな私を暖かく家族の一員として接してくれ、Katieのママは料理がとてもうまくいつもご馳走を作ってくれました。もちろん私のホストファミリーも私を本当の子供のように接してくれ、ママとは友達のようにグラグラ笑いながら話したり、時には涙ありのお話もしたりと楽しかったです。そして何回も毛染めをしてもらったりプロムでは髪の毛とネイルもしてもらいました。ダッドとはHunting



に行ったり現在の若者の麻薬の現状や犯罪事情などを真剣に話し合ったり。Caitlinとは良い姉妹関係を築けたと思っています。小さい子と触れ合うあまり無かったので良い機会でした。クラブはバレーとソフトボールをしました。もっと友達の事を知れ、仲を深める事ができたし何より友達が増えました。だから留学をするなら何かスポーツをしたらとてもいいと思います。

あとアドバイスは、悲しいことや悔しいことはもちろんありますがそういうときにポジティブに考えるようにすれば物事は上手くいくということです。前向きに考えるとその悲しかったりしたことをバネにもっと頑張ろうと思えたり、それがあつたからこそ今これができるという風な考え方ができるのです。

7ヶ月ぐらいい終ち、Katieと私はいつも一緒にいないと変と思うくらいの仲良しになりました。悩み事や恋の事など何でも話せる親友になっていたのです。クリスマスにはプレゼント交換をし合ったり、イースターには一緒に卵に絵を描き、毎週水曜の夜にはteenagerだけが行く教会に行き踊りながら歌を歌ったり。だから私はKatieと離れたくありませんでした。ケイティは最後お別れパーティを私のために開いてくれて、たくさんの方が来て楽しい時間を過ごせました。ケイティは私にスクラップブックを作ってくれました。そこには私とケイティとの思い出がたくさん詰まっていて、泣いてしまいました。そしてケイティの両親からは家族全員が持っているというアイルランドからの指輪を貰い、アメリカのあなたの家はここだからいつでも帰ってきてね、と言ってくれ更に号泣しま

(次ページ★に続く)

# 一生で一番充実した一年間

深井瑛子

高等部2年

私は、つい三ヶ月程前まで、YFU (Youth For Understanding) という留学団体からアメリカのインディアナ州に留学していました。インディアナは山がなくともろこし畑が広がっているだけの田舎で、空がとても綺麗なところ。毎朝学校に行く時には、地平線からでてくる朝日を眺め、夕方には地平線に沈む夕日を眺めていました。しかし、今となってはアメリカで起こった事のすべてが夢のようです。誰も知っている人がいない、行った事もないアメリカで一年間も留学しようと思ったなんて今となっては自分でもこわいものしらずというか、勇気があったなと思います。しかし、決めた時も、飛行機に乗っている時も全く心配はしてはず、ただ楽しみで、これから色々な事が起こるであろう一年間のアメリカでの生活に期待と希望を膨らませていました。

学校の初日はもちろん誰も友達がいず、とにかく友達をつくりたい一心で色々な人に話し掛けて、一ヶ月もすれば学校や学校外にもたくさんの友達ができました。部活にはダイビング、テニス、バンド、marching bandのguardをやっていたので部活に入ると色々な友達ができいき、日に日に学校が楽しくなっていました。特に、一年を通してずっと大親友だったMorganとは本当に毎日何をするのも一緒に、学校がある日はもちろん、休みの日もほとんど一緒に遊んでいて、Morganの家族ともとても仲良くなりました。

しかし、学校が楽しくなってゆくにづれて段々host familyにいづらくなってきました。Host brothersやHost sistersと、もう一人そのhost familyのお家にステイしていたドイツ人のstephanieとはとても仲がよかったのですが、host parentsとは何を話しているのかわからなくなってきた、一月にはホストチェンジをした方がいいと、YFUの方から言われ、ホストチェンジが決まりました。その時まで、私は家ではとても辛い思いをしていましたが、誰にも相談したりしませんでした。みんなには、私は何の問題もなく楽しくやっていると思っていてほしかったからです。

二つ目のhost familyにはすぐに溶け込む事ができ、本当に自分の家のように楽しく、リラックスできるお家でした。私はこのhost familyの事が本当に大好きでしたが、最初からこのhost familyに来ていればよかったのに、とは思った事は一度もありません。一つ目のhost familyにいた事により、自分がとても成長し、強くなったからです。それに、そこでは辛いことばかりだけでなく、もちろん楽しい思いでもいっぱいいっぱいあるからです。

三月には、世界15カ国からきたYFUの留学生50人と共にフロリダにいきました。私たちがフロリダに居たのはたったの五日間でしたが、色んな国の人と友達になり本当に楽しい旅行になりました。別れる時は、悲しくはありませんでした。なぜなら、一ヶ月後に、次のYFU tripがあり、フロリダに行ったほとんどの人達が行くといっていたから



です。次のYFU triplはニューヨークでした。そこへは100人の留学生と共に行き、この旅行は今までの私の人生の中で行った旅行の中でどれよりも一番素晴らしい旅行だと、何の迷いもなく言えるものになりました。私は、たった六日間のこの旅行で、世界中に一生の友達を作る事ができました。今度の旅行での別れは、決して簡単なものではなく、みんな号泣して別れました。その友達とはもちろん今も連絡をとっていて、私は近い将来にみんなに会うためにヨーロッパに行く事を決めています。そしてその為にドイツ語を勉強し始めました。

この一年間、私は本当にたくさんの事を吸収して帰ってきたと思っています。一年を振り返ってみれば本当に短かったけれど、同時に本当に長く、濃い留学でした。私は、留学させてもらった事を心から幸せに思い、家族をはじめ、先生方、二つのホストファミリー、友達、先輩、後輩に本当に感謝しています。困った時や悲しくなった時、いつもみんながそばにいてくれたから、一年間やってこれました。

留学前、留学中にみんなからもらった手紙やメール、言葉には本当に勇気づけられました。ありがとう。

(★前ページの続き)

した。

自分自身変わったことは、日本のいいところがたくさん見つけられたところです。やっぱり日本を離れてみて日本人であることに誇りを持つようになりました。客観的に自分の国をみつめるといろいろ見えなかったものが見

えます。そして何よりも自分がどれだけ幸せなのかを学ぶことができたと思います。平凡な生活が実は一番幸せです。そして、誰もがたくさんの人に支えられて生きているということをおぼえてはならないのです。留学は英語を学ぶに行くことでもあるけどそれ以上

に、そういう人生にとって大切なものを学ぶことなのだと思います。留学をサポートしてくれた先生や友達、そして本当に本当に家族には感謝の気持ちでいっぱいです。Thanks you so much, it was awesome!

## <夏休みの報告>

# 夏～屋久島 科学部合宿報告

田宮康裕  
高等部1年

この夏、科学部では7月18日から26日まで合宿をしました。千里中央から夜行バスとフェリーを乗り継いで、約18時間かけて憧れの島：屋久島に着きました。海はさまざまな青で彩られていました。あちらでは、事務長の下村さんの別荘を貸していただきました。その家は清らかな小川や緑の木立に囲まれた素晴らしいところにありました。

翌20日、縄文杉(あの有名な屋久杉)に会いにボランティアの西川さんの案内で山を登って行きました。急な坂や階段が多かったので縄文杉に出会えた時はすごくうれしくなりました。お昼のお弁当は格別に美味しかったです。何て言うか達成感というのが湧き上がってきました。帰りは屋久島の自然を堪能しながら楽しく下りました。本当に！「もののけ姫」の世界で、自然の美しさにもすごく感動しちゃいました。往復10時間ほどのお勤めの登山です。

21日の夜に大学教授のカーシュピング先生(保護者)の屋久島の地質学の講義がありました。屋久島は約1400万年前、マグマから生まれた花崗岩の塊が、海底の粘板岩を押し上げて出来た島です。翌日は、フィールドに出て花崗岩のサンプルコンテストを行いました。結果、7年松本直也くんの採った石がベスト1になり、現在、大学のサンプルルームに名前入りで展示されているそうです。

また、マイクロバスを借りて隆起火山、隆起珊瑚を見たり、硫黄温泉に入ったり、博物館に行ったりしました。硫黄温泉はすごく卵臭くて、正直最初は「クッサー」と思いましたが、だんだん慣れてきて気持ちよかったです。この温泉は露天風呂で海の隣にあったので眺めが最高でしたが、着替えるところもなく昼間は丸見えなので暗くなってから入りに行きました。温泉では、満天の星空を眺めながら地元

の人と話をして盛り上がりました。温泉から出たら、海の家で夏の醍醐味カキ氷を食べました。しかも、そこで漁師さんからすこし前まで生きていた鮮度抜群のタコの刺身をご馳走になりました。

有意義な合宿は予定通り進んでいましたが、23日に台風7号の情報が入ってきたので予定を1日早めてフェリーに24日に乗り、25日の帰りの夜行バスに乗るため鹿児島に1泊することにしました。案の定25日は欠航でした。

鹿児島に着いた私達は、屋久島から予約しておいたビジネスホテルに泊まりました。次の日、桜島の観光バスに乗って噴火の跡を見たり、おいしい桜島大根の漬物を食べたり、また、かごしま水族館に行ってジンベイザメや、海蛇、イルカ、ラッコ、鯨などに会いました。ちょうどイルカの時間だったので、イルカについて学ぶことが出来ました。初めて見た魚も多く、魚の行動一つ一つが面白くてとても楽しかったです。最後の夕食は豪華に鹿児島黒豚トンカツを食べました。美味！！そして、雨の多い屋久島で一度も雨に会うこともなく、鹿児島でもお天気に恵まれ、台風よりも早く26日朝6時に無事に千里中央に着きました。

料理を作ったり、掃除をしたり、やる事が一杯で大変でしたが、(基本的に午前中は数学の勉強をする予定でしたが、家事に追われ時間があまり取れませんでした。)色々勉強になり充実した屋久島の日々は良い思い出です。自然の有難さも実感することが出来ました。下村さん、西川ご夫妻、カーシュピング先生、屋久島の資料を提供して下さった大学の先生方、新見先生ありがとうございました。

\*英語の方はもっと詳しく書いてあります。

岩本麻里  
高等部1年

合宿に参加し、映像でしか見た事のなかった屋久島の大自然に触れ改めて守っていかなければならない事を実感

しました。この約一週間の共同生活の中で学校ではあまり喋った事のなかった人達の新しい一面を知る事ができ、とても有意義な時間を過ごす事ができました。私達を引率して下さいました新見先生、鉱石のお父さん、そして登山ガイドをして下さった西川ご夫妻、島内を案内して下さいました現地のバスの運転手さんに心から感謝いたします。最後になりましたが、私達が現地に入るまでに補修や準備に大変にお世話になりました下村さんには感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。

Trip to Yakushima -- July 18-26  
Koseki Kobayashi

SIS Gr.10

During this summer break in mid July, 15 students of the science club with Shinmisen sensei and one geophysicist (who happened to be my father, Joe Kirschvink), went to the island of Yaku and camped at the cottage owned by Mr. Shimomura, business manager, for 7 days.

We took a 10 hour red-eye trip on a bus from Senri-chuo to Kagoshima and a ferry from there to our destination "Yakushima". Our trip departed at 22:00 in July 18 and arrived at 15:00 in July 19. Overall, it took 18 hours total to get there!!

Since the cottage was located in the middle of a mountain, we had to drive 15 minutes to the nearest supermarket to buy food and drinks. We decided to take turns for cooking everyday so, the first thing we did was to split us into 3 cooking groups. Each of us was responsible for at least three menus and the amount we needed to cook for a day.

The next day, we went to hike up the mountains to see the Johmon-Sugi, which is known as the oldest Yaku cedar in Japan. It took us nearly 5 hours of walking in the mountains to reach the cedar of Johmon. Although the hike was really tuff, we forgot that we were tired when we saw the tree. It was nothing compared to a photograph



taken by a camera. We were all stunned by its size, greatness and dignity.

After that, we went to a hot spring near the ocean. I felt that this was originally open to both men and women, because the bath was separated only by a small wooden wall between the men and women. When we first got there, we all shouted, "Yuck!!" because of the smell of sulfur. As we got in, we eventually got used to its smell. We went there almost every night; saw thousands of stars which we were never able to see in Osaka. They were so beautiful. We chatted to local people and after that, we enjoyed shaved ice.

The next day, we woke up late in the morning. We went to a place called "Kurio". We swam and challenged to fish, but we had no luck in catching a fish, except one person who caught a baby fish which was not eatable. Later we learned that we had to go fishing when the tide was high, which meant that we had to wake up early in the morning, otherwise the fish aren't hungry. We gave up and instead, we swam and ate shaved ice.

The main goal of this trip was to study Mathematics and Science. We were supposed to study these subjects intensively during our free time. Unfortunately, cooking, dish washing, cleaning the garbage, and fighting with cockroaches and huge spiders took most of our time. But, we did learn a lot of science

about the island of Yaku.

On the 22nd, we learned Geology about Yakushima from my father. He took us to geologically interesting places with the help of the geological map of Yakushima. Yakushima is called a "Pluton", which was once the bottom of a large volcano that was filled with magma. The molting rocks in the magma chamber are called "granite" and are lighter than the seafloor rock. When it is lighter, it floats up like a bubble; this is why Yakushima became round and high. After my father explained us the formation of Yakushima, he asked us how to calculate the thickness of Yakushima, using the density of granite and iron. Everyone was confused. Later we went to the Yakushima museum and saw an article about how Yakushima was formed in Japanese and everyone understood at once. I thought it was funny because it took him 30minutes to explain us what a "Pluton" was, but it took only a minute for the museum to explain.

As there was neither a television nor a radio in our cottage, we didn't know that a huge typhoon was approaching us until the local people told us about it. On the 23th, we decided to head back to Kagoshima one day early, to avoid being stranded in Yakushima. Incidentally, the ferry boat back to Kagoshima for the next day was scheduled to be cancelled. Since we couldn't change the bus back to Osaka,

we had to spend a day at Kagoshima. We ate at a famous Ramen restaurant that night, and stayed at a reasonable business hotel. The next day, on the 25th, we took a mini-bus tour to see the city of Sakurajima for 1300 yen per person. After that, we took a Kagoshima City View bus tour, but unfortunately, this tour was so boring that half of the people slept in the bus. However, we still had some time left. We went to the "Io World Aquarium" to see the whales and dolphins. That was fun.

The bus left the downtown of Kagoshima, Tenmonkan, at 8:00 PM, and this was our last 10 hour red-eye trip. This time, we slept pleasantly through the way, mostly because we were exhausted. We got back to Senri-chuo at 6:00 am in the following morning.

The trip to Yakushima was an unbelievable experience for us, 10th graders and 7th graders. Seeing the oldest cedar, watching the million stars, fishing at the ocean, living in a totally rural countryside, cooking, and fighting with spiders and cockroaches and studying the Geology of the Island of Yaku was something we couldn't experience in a normal school life.

We all would like to thank Mr. Shimomura who offered us his cottage to let us stay, our great chemistry teacher Shinmi-sensei and my father who guided us to make the trip successful. Finally, I would like to thank to Mr. Takemaru Hirai, who is a graduate student at the Department of Earth and Planetary Science in University of Tokyo for providing us a geological map, and Prof. Ryo Anma at University of Tukuba for providing us geological references.

Anma, R. and Sokoutis, D., 1997: Experiments on pluton shapes and tracks above subduction zones. in granite: from segregation of melt to emplacement fabrics; J. L. Bouchez, D. Hutton and W. E. Stephens (eds.), Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, p. 319-334

# 一夏に二つの大きな体験

清水 航  
高等部1年

## 最高だった！日本の次世代リーダー養成塾

7月27日、リーダー養成塾が開塾した。大阪の伊丹空港から福岡空港へと飛行機で向かった。二日前に風邪を引き、体調はあまり良くなかった。しかし、やる気は十分。

リーダー塾に入るきっかけとなったのは友達に誘われ、講師陣の名をみてからである。日本を代表するトヨタの会長でありそして日本経団連会長でもある奥田碩。前マレーシア首相のマハティール・モハマド。昔、財務省で「ミスター円」と呼ばれ、現在慶應義塾大学教授の榊原英資。そしてOISの卒業生、ヤッパ株式会社取締役社長の伊藤正裕。豪華すぎると言っても良い先生達。私は、是非彼らの講演が聞きたいと思いきま応募しようと思った。選考方法は、一次試験が作文と自分の経歴などであった。一生懸命がんばった。まさか受かるとは思わなかったが、合格。そして、2次試験。3対3の面接。自分の言いたかったことがすべて言え、最終合格。本当にうれしかった。

リーダー塾での主なスケジュールは講師の方の講義を1時間聞き、30分の質問タイム。そしてその後、各グループ内で互いにディスカッションなどで講義について意見を言い合う。参加生徒は合計で160名。各クラス20名ずつ、各クラスに担任と担任補助員が1人ずつついた。私はH組に配属された。

試験には合格したが、入塾までに読んでおくべき本が20冊もあった。どの本も難しく、何度も繰り返し読まなくては意味がまったくわからなかった。なんとかがんばって5、6冊読んだ。それが限界だった。きっと皆は全冊読んできたのだろうと考えるとリーダー塾に行くのが少し恐ろしくなった。「自分はリーダー塾に行く生徒とし相応しいのか？」という不安も抱き始めた。しかし、こんな小さな器しか持っていない自分にこのような大きなチャ

ンスが与えられたことに感謝し、沢山失敗し学んでこようとも思っていた。

福岡空港に到着。そこから福岡グローバルアリーナまでバスで一時間。集合時間は四回あったが、なるべく早く行ったほうが気持ちも落ち着くだろうと思い一番最初の集合時間を選んだ。バスの中では自分の他に3人の生徒がいた。早速本をよんだかと聞いた。すると返事は「いいえ」だった。皆状況は自分と同じだったのだ。それから互いにバスの中で自己紹介をし、さっそく仲間ができて本当にうれしかった。皆、自分と同じ不安を抱きリーダー塾にきていたのだ。

グローバルアリーナに到着。建物や様々なスポーツグラウンドが緑の中に建てられていて最高の環境だった。いよいよリーダー塾での2週間生活が始まった。

驚くことにリーダー塾ではすぐさま沢山の友達ができた。みんな本当に良い仲間だったのだ。互いに気を遣うことは一切なく、正直に自分たちの言いたいことが話せた。毎日が充実して、時間が過ぎるのがあっという間であった。

そして、自分がグループのリーダーをやらせてもらう後半の一週間が始まった。リーダーとなるからには、グループをまとめる必要はもちろん、ひとつひとつの行動に大きな責任感を持つことになる。

しかし、その初日に大きなミスをしてしまった。マハティール先生の講義をグローバルアリーナとは違った場所で聞かため、バスで移動することになったのだが、自分を含めるH組のグループの中の数人、他のグループの何人かがバスに5分ほど遅刻してしまったのだ。そこで担任の先生はH組のリーダーである私にもっとしっかりしろとかんかんに怒った。先生の顔はまるで鬼のようで見ただけでも恐ろしかった。そして、失敗したことは仕方がないからこれからのことを考えるとやわ



経済同友会代表幹事で日本IBM代表取締役会長の北城格太郎さんと

れた。

先生の怒りのおかげで自分は成長できた。自然にメンバーの点呼を取り先生に報告できるようになっていた。グループ内でも積極的に発言し、講演でも勇気を持ち沢山の発言ができた。1つのミスで成長へと先生が変えてくださったのだ。本当に感謝である。周りの人たちに「航、成長したな！」と言われたときは顔では笑っていただけだが、心の中ではガッツポーズであった。本当にうれしかった。

後半の一週間はあっという間であった。最後の日はほぼ全員が徹夜。お互いに自分が持つ夢などを語り続けた。徹夜で話し続けても、もっと話したかった。そこまで仲が良かったのだ。

そしてついに卒業式。互いに無事卒業できたことを喜びあった。そして涙を流しながらそれぞれの帰途について。

リーダー塾での生活は人生の中で最も充実していた。ここで数々の失敗をし、多くのことについて学んだ。そして、なによりも年代を超えた沢山の親友ができた。本当に素晴らしい時間を過ごすことができた。しかし、これで終わりではない。これからが大変な現実でのスタートである。リーダー塾で経験を生かし、これから様々なことに前向きにチャレンジしていきたい。

最後に、このキャンプに関していろいろとご協力、ご相談して下さった馬場先生、栗原先生を始めとする先生方、ならびにスタッフの皆様方に心からお礼を申し上げます。本当にありが

とうございました。

## My Memorable Summer Camp

Hello, my name is Wataru Shimizu. I am a tenth grader at Senri International School. On August 12th, my memorable eight days at an English summer camp called the Pacific Rim International Camp (P.R.I.C) has started in Nagano. Because it was an English camp, I will try to write this report in my best English.

The first day of P.R.I.C. camp was surprising. The campers were all boys. I thought this camp was for boys and girls, however it was not. Only boys were allowed to attend this camp. I did not know until I met Japanese campers and when I heard about it. It was like a culture shock. Imagine there are only same sex people surrounding you. It makes you shocked.

I was feeling shocked all that day. My shock was big. However when I saw Campers From Abroad (CFA) the next day, my shock diminished. I reminded myself why I came to P.R.I.C camp. I came to the camp to learn English and make lots of friends from foreign countries. From that point, finally my camp started.

It was really hard and fun to talk with other people in English. Because most Campers From Japan (CFJ) were not good at English, we tried really hard to communicate with CFA. We used English all the time even when we talked with Japanese campers so that CFA could understand what we were talking about. This effort improved our English level.

After I realized what I should do at this camp, the six days passed really fast. Every day was exciting and I really enjoyed the camp, so the last day came quickly.

The last day's Camper's Fire event was the most memorable event for me. All of the campers needed to decide what they would do at the campfire. We chose to do two games and three skits. Each skit had one song that had a relationship to it. And at last we decided to state our impressions one at a time. It was the last event so the campers thank the staff and counselors. At the event, I became one of three representatives at the camp fire. Most of

my job was interpreting. This was a great experience for me. It was really hard to translate Japanese to English, or English to Japanese but I did my best.

The Camper's fire time came. The campers came in with torches and the campfire started.

At the beginning we sang the PRIC song. This was the song of Pacific Rim International Camp. It was the song everyone memorized so this song was suitable for the opening. I counted five and everyone sang.

After we sang the PRIC song, the skits started. I liked all the skits and the messages but my favorite one was the first skit, because it had the best message. The story was about two boys who were rivals and they both wanted to be number one at everything. One day, they had a canoe race. Boy A was winning, but before he passed the goal he fell out of the canoe and nearly drowned. Boy B saw that and helped Boy A. This made a great friendship and they knew the most important thing is to be yourself, be the only one. After the skit finished we sang "SEKAI NI HITOTUDAKE NO HANA". This is the song that has the message, "No Need to Struggle to Be Number One. Just Be Yourself, Be the Only One."

The last event of Camper's Fire came. Everyone said thanks to the staff and stated their impressions one by one. Some people spoke Japanese, however most people tried to do it in English. They showed how much their English at P.R.I.C camp had improved. Everyone looked braver than before they came to the camp.

While I sat there respecting other people's growth, my turn came to speak. I was not thinking about what to say, so I just said what I felt at that time honestly. First I spoke in Japanese and after that I tried in English. I spoke as loud as I could.

I said, "At first P.R.I.C. gave me a culture shock. There were no girl campers so I was really depressed on the first day. However, after I realized why I came here, everything



became fun. I came here to study English and have great experiences. I will never forget what I learned from the camp. I met lots of my new friends at the camp. I will never forget them. They are my friends for the rest of my life. I really thank the staff, counselors and campers who made the camp really fun. Thank you for everything."

To finish the camp with everyone in a good mood we all sang a song called "Leaving on a Jet Plane". The song lyrics fitted the situation. We hugged each other at last and the Camper's Fire finished wonderfully. I did not cry, but some people were crying. When I saw those people I gained confidence in heading events. I also understood how much the staff and counselors worked at this camp.

I will never forget about P.R.I.C. I will never forget the experiences from the camp. I will never forget what I learned at the camp. And I will never ever forget the friends I made at this camp. The campers, staff and counselors are all friends now. There are no more cultural problems with us. Maybe some people think they still have some. Of course, we all have different living styles, cultures, thoughts. However, I think those things can be solved by people's enthusiasm. Cultural problems diminish by our enthusiasm for wanting to be friends with each other. This camp taught me that.

I really appreciate to the teachers and the campers who supported me and the staff who coordinated the program. I had a wonderful time.

# 彩都ですごした夏休み

青木光理  
高等部3年

今年の夏は大人になっても忘れることができないだろう。毎週のように里山にはいり、連日の地学室でのミーティング。この結果、私たちは夏2ヶ月間にわたる、未来の学校『ダヴィンチ村』を作り上げました。今山には、おいしいパンが焼けるかまど、世界で一つしかないバイオトイレ、そして雨の水をたくさんためられる水がめがあります。そしてこの夏のちプロジェクトのおかげで、里山のすばらしさ、いのちの大切さを学ぶことができた。以下はそれぞれのイベント後に担当者がHPように書いたメッセージの抜粋です。

## かまど作り

かまど班総出でどんどん積み上げられていくレンガ。アーチはとても難しいと思っていたのですが、実際やってみると結構簡単でした。しかし、またもやハプニング発生！！レンガの数が足りなくなってしまったのです！かまどの上のほうだったため、しっかりレンガが楔型をしていないとそのレンガは抜け落ち、かまど全体が崩れ落ちてしまうことに…。でもレンガはない…。そして、どんどん日も落ち、暗くなってゆく。みんなが不安とあせりでいっぱいになってしまいました。最終手段として、森脇先生がレンガカッターを使って一つ一つ楔形のレンガを作ってください、モルタルを詰めて午後7時過ぎ、かまど完成！最後のレンガはみほがみんなにカウントダウンされながらはめ込みました！！かまどが完成したときの感動は忘れられません。企画段階のつらかったことが一気に頭を駆け巡り、みんなの努力がかまどを完成させたのだと思うと、嬉しくてたまりませんでした。しかし、かまど完成がゴールではありません。これからパンを焼くというまたまた大きなハードルが私達を待ち構えています。おいしいパンが焼けることを祈りつつ、弁天さんの花火を見ながら幸せに浸るかまど班でした。かまど制作に関わって

くださったみなさん、本当にありがとうございました！！（みほ）  
トイレ作り

今日はWSではないけれど、バイオトイレを完成させに山まで来ました！途中で雨が降り、どうなるか心配だったけど、無事に完成させることが出来ました。

みんな、お疲れ様でした！！

世界で初のバイオトイレをみんなで作り上げることが出来ました。

最後に、藤村先生の名言を！

「都会のトイレと競争しても、バイオトイレは勝つことが出来ない。でも都会のトイレは、色んなものを犠牲にしている。快適便利を捨てると、大きな何かを得られる。」

みんなは、どんなものが得られたかな？私は、大いなる達成感を得ることが出来ました。（よしえ）

## 森の恵みを食べよう

8月17日のイベントのコンセプトはいのちの大切さ、尊さ、そしてありがたさを知ろう！というものでした。昆虫採集後、再びキッチンに戻って来た時の子どもの笑顔は生き生きしていました。元気に虫を見せてくれる子どもやバケツ一杯の植物を見せてくれる子どもなど、みんな嬉しそうでした。そして今度はそれを調理して食べました?!食べ終わったら、いのちを与えてくれたことに感謝の気持ちを込めて、ごちそうさまでした&ありがとうをみんなで言いました。この行為によって、イベントのコンセプトを十分理解してもらえたと思います！子ども達、保護者の方々、先生方、地元の方々、そしてグループリーダーは、世代を超えて素晴らしい交流を深めることが出来ました！！

最後になりましたが、このいのちのイベントに携わってくださった全ての人に、ありがとうございました！！



最高のイベントとなりました！！！！  
（麻美）

## 水がめ

水がめ作りの時間の間に参加者の皆に水がめに飾りつけとするタイルを作ってもらいました。一塊の粘土をべったんこ状態にしてそれを好きな形に切ったり、表面に絵を書きました。条件は絵と形は山で見つかるものであること！蝶々とありがめが人気でしたよ。そして二日かけて作っていった水がめが完成しました！

宮本先生が手を加えて整えた後の水がめの形は口が大きくとても立派です！完成した水がめに事前に作った皆のタイルを一つずつ付けていきました。そして「2005年7月16・17日水がめワークショップ」と日付を書き、水がめが完成しました！皆さん本当にお疲れ様でした。最後に忘れられてはいけない水がめ一号機の幕開けです。

実は4日間もかけてキッチン裏で炭を使いながらもくもくと焼き続けていました。山で連続お泊りして水がめの世話をしてくれたスタッフに感謝です！参加者がとてもいい経験をして、水がめに愛着心を持たれたようだと思います。とても立派な水がめができて宮本先生が“私もびっくりした程でした”そうですよ。（りえ）

この活動を通してすばらしい専門家の方々、子どもが大好きなユースの方々、そして私たちの活動を支えてく

(次ページ★に続く)

# ☆10日間で得た本当に大切な友達と経験☆

～US High School Diplomats 2005に参加して～

左海美鈴  
高等部2年

今年の夏、私はUS High School Diplomatsというプログラムに参加しました。USHSDでは日本国内いろいろなところに住んでいる日本人男女各13人とアメリカのVirginia周辺に住むアメリカ人男女各13人と一緒にお互いの文化や言語をよりよく知るために10日間の共同生活という素敵な経験をしました。

でもこのプログラムが始まる1ヶ月ほど前から日本の紹介をするために会ったことも直接話したこともない人達と準備をしないといけないという大きな課題が立ちだかっていたのでした。ちょっと会って話す、などとてもできるような距離ではなく、まったく知らない人たちとメールだけで考えを伝えるのはとても難しかったし、すこしごちないままでした。でも日本人だけの事前合宿のときに日本人のメンバーに初めて会い、いろいろな方言が飛び交いながらもアメリカ人が合流するまでのたったの3日間でみんなと急激に仲良くなれました。

プログラムでは毎日activityがいっぱいあり、プレゼンでお互いの文化を紹介したり、遊んだり、たくさんの思い出ができました。私はこのプログラムでほとんどまったくと言ってもいいほど知らなかったアメリカのことを学

び、また私は茶道を披露したり、女の子全員に浴衣を着付けてあげたりなど、日本の文化を多少紹介できたと思います。こんなふうと一緒に時間をすごしていくうち、メンバーのみんなとはどんどん仲良くなって、ほんとはたったの10日間しか一緒にいなかったとは思えないほどとても強い友情・信頼関係で結ばれました。みんなとても素敵な人たちで、それぞれ何か特技があり、いろんないいところを持っている人ばかりでした。私はこのプログラムで出会った人たちみんな大・大・大好きで、尊敬していて、友達だということ誇りに思えるくらいです。

たったの10日間。でもルームメイトや他のUSHSD2005のメンバー達と一緒にしたことはいっぱいあって、一緒にがんばったり、笑ったり、考えたり、泣いたり、ふざけたりした思い出もいっぱいあって、本当にずっとずっと忘れられないものとなりました。プログラムはもう終わってしまったけど今はメンバーとはチャットやメール(プログラム前はよくわからなかったメールのニュアンスなども相手のことをよく



知った今では結構理解できるようになり、それだけみんなと近くなったんだなぁと実感します。)、電話などで連絡を取ったり、住んでいる地域が近い人たちとは遊んだりしています。簡単には会えない人もたくさんいるけど、これからも繋がっていつづけて、『いつかまた絶対に会おうね』という約束を必ず果たしたいです。

私の夏休みのたったの1/6という短期間でこんなにたくさんの体験をして、参加していなければ絶対に知り合うこともなかったらう人たちともこんなに仲良くなれて・・・このプログラムは私にとって一生ものです。だからこのプログラムを紹介してくれた先生、参加させてくれ応援してくれた家族、プログラムのリーダーをしてくれた方々、そして私のUSHSDでの大切な友達、ほんとにありがと～

(★前ページの続き)

れた国文、メディアラボの方々、SIS,CS(大学生スタッフ)、IMIの方々とお会いすることが一番の喜びです。さすが出会い系彩都。たくさんの良い出会いに感謝です。このプロジェクトが成功するまでの道のりは本当に長かった。上手いかなかったときの、みんなの悔しそうな顔、メンバーを集めようと必死な顔、どうしたらいいかわからなくて悩んで、泣いていた顔、そし

て成功したときの自信に満ち溢れた笑顔。どれもすばらしかった。でも、最後の笑顔をお忘れなからね。21日のフィナーレに私たちは里山家族という名前をつけた。この夏をすごしたみんなが私の里山家族であると断言できる。苦しさ、楽しさすべてをひと夏で分かち合えたことはずっと忘れない。そしてみんなと分かち合えて本当に良かったと思う。最後にみんなに一言。

このSISメンバーの夢を実現に変えられたのは、IMIの増井さん、田中先生、CSメンバー、国文の支えがあったことをお忘れなでね。感謝の気持ちを忘れずに。そしてみんなはこの夏を、やりとげたことに自信をもって未来に進んでいきましょう。ありがとうございました。

# 新任の先生紹介

## Catherine Brown (English)

I am an ESL teacher. I first started teaching in the UK and since then I have worked in Spain, Uganda, China, Japan and Australia. I have worked in SIS before and it is very exciting to be back here after four years away. It's great to see the Year 11 and year 12 students that I have taught before and to meet other students for the first time. I took an honours degree in English Literature at Warwick University in the UK and completed a Diploma in Teaching at Leicester University. I have a MA from Sheffield University and completed my thesis on "Images of Japan in Contemporary Western Fiction."

## Leanne Stephen (Art)

I have been teaching Visual Arts for 24 years. My most recent experience was in Sydney Australia where I taught at a bilingual Greek school. I have a Graduate degree from New South Wales University, College of Fine Arts and a Masters in Curriculum and Teaching from Michigan State University, USA. I am excited about my return to Japan and look forward to my involvement in school life at Osaka International School.

## Barbara Bertram (Art)

After a varied ten years of teaching both Fine Art and Design Technology in the USA and Europe, I am pleased to make a home here at this time. I am happy to share my experience as teacher and working artist with the exuberant students at OIS while also exploring the art and architecture of Japan that have always captivated me.

I have lived in the stunning foothills of the Rocky Mountains where I graduated from the University of Colorado with a BFA. Soon followed by graduate work at Colorado State University in Technology Education where I earned my teaching credentials in both Vocational Education and Art Education.

Prior to teaching I built houses, made wooden toys and furniture, marketed art,

ran a graphics design business, and created traditional crafts and paintings. I bring this diverse background into the classroom for students to express their creative ideas while also learning about the business of art.

## Paul Lindley (Music)

My name is Paul Lindley and I am currently one of several new teachers to Japan this year. My wife who teaches in OIS and I are happy to be living here since Japan is one of the areas of the world that we have always wanted to visit. Also, as a music teacher, I find Japan to be one of the richest cultural centers of the world. I have a Bachelor of Music Education degree and an advanced degree in Instrumental Conducting from West Texas A&M University in the United States. Again, let me thank you for all of the help many of you have offered in helping me and my wife to settle into our new home in Osaka.

## Kelly Welch (Librarian)

I come to Osaka most recently from teaching in Dubai with my husband, Tony Walker (OIS MS mathematics), and I am very happy to be working in the SIS/OIS library. We have lived and taught overseas for several years, but we are especially pleased to have secured positions here in Japan. Although I am now a librarian, my education experience began with classroom teaching. Later I became an ES technology teacher, and later still I added the library to my list. Working here with Aoyama sensei and the wonderful library staff is sure to be a rewarding experience.

## 東 千歳(保健体育)

はじめまして。9月から千里国際学



後列向って左から Paul Lindley, Barbara Bertram, Catherine Brown, 前列 Leanne Stephen, 東 千歳, 柳 蕙心の各先生方

園でお世話になることになりました東千歳です。今、この学校での生活が始まって数週間が経ちますが、まだまだ新しい事ばかりで戸惑いの日々を過ごしています。ただ先生方をはじめ、生徒にも多くの事を助けてもらいながら、気持ちよく学校生活を送れているので大変感謝しています。この学校には新しい人が入ってきても、それを自然に受け入れられる雰囲気を感じます。専門は水泳で気がつけば24年も経ってしまいました、トライアスロン歴も6年と持久系スポーツが大好きです、もちろんどんなスポーツも皆さんと一緒に楽しみたいと思っています。至らぬ点が多いかと思いますが、私自身も千里国際学園で多くのことを経験し学び成長していきたいと思っていますのでよろしくお願い致します。

## 柳 蕙心(中国語)

Formosa(美しい島)台湾からの柳です。2005年秋学期から、中国語の授業を担当いたします。中国語の文字は勿論、響きのある美しい中国語を教えます。ようこそ中国語の世界へ。

## <OIS所属の先生方>

Tina Filipo(English)  
 Ronald Sietz(English)  
 Amy Lindley(English, ESL)  
 Gillian Stevens(Elementary)  
 Anthony Walker(Mathematics)  
 松本直子(日本語)  
 松田理恵(日本語)

# 夏のフランス滞在記？！

青山比呂乃

図書館

いつも図書館についての記事を書いています。今回は保護者会のページの記事に図書館のことをたくさん書いてしまったので、まったく違う「ことば」の話をしましょう。SISにいる人は、皆それぞれことばではいろいろ苦労していると思うので、読んでみてください。

私は東京生まれの東京育ちで、海外に住んだことはありません。中学高校の頃の英語は、成績で言えば万年B、嫌いではなかったけれど苦手でした。本を読むのは大好きで、本当は英語でもスラスラ読みたいのに、読めないのが嫌だったので辞書を引くのが嫌いで、予習もろくにしない生徒でした。国際基督教大学（ICU）というSIS同様バイリンガル教育をすると謳っている大学になんとか入ったのはいいのですが、英語ではとっても苦労しました。SISに高校から一般生で入った人の気持ちに近いかもしれません。

SISができる時に30歳で初めて大阪に来て、もう15年目になります。ICUのおかげで日英語の飛び交う環境にはある程度慣れていましたが、SIS/OISでの最初はまず大阪ことばに慣れなくて、真似することも不可能でした。（今は怪しい関西イントネーションでしゃべっていることもあります）

英語もSIS/OISでアメリカ、オーストラリア、カナダなどいろいろな国から来ている同僚のことば（いや発音などは個人的な違いが大きい？）に囲まれて、どんな学校にするのかのディスカッションなどをさんざんするうちに、ずいぶん鍛えられましたね。2年くらい経って、CNNなどのテレビニュースが理解できるようになっていることに気が付いて驚いたのを覚えています。

このように、それなりの年齢になっても短期間の間に、英語力がアップしたと実感したわけですが、その後はそれほど伸びを感じることも無くなってしまいました。つまり、SIS/OISでは、英語で話をする相手は、もう今の

私の多少怪しい英語でも理解してしまうからなのです。ともかく通じればよい、という意味では用は足りているので、それ以上伸びようがないのです。

さて、2000年のゴールデンウィークのことです。東京にいた頃、一緒の合唱団で歌っていた高校の数学の先生をしている友人と会ってご飯を食べながら話をする機会がありました。「夏休みに、日程の都合で自分には行けないフランスで行われるバロック音楽講習会へ行って、先生の音楽の講義を録音してくれないか、そうしたら日本でそれを解説してあげるから」というのです。彼女は、長年趣味でチェンバロとパイプオルガンを習っていてフランス語もべらべら、夏休みになるとフランスへ音楽しに出かけていたのは知っていたのですが、「私はフランス語やったこともないし」と躊躇すると「英語ができれば大丈夫！」といわれて、ついその気になってしまいました。

でもそれからが大変。私が講習会に行くとしたら、オルガンは弾けないから声楽の方しかありません。歌を習うのにことばが出来なくてはやはり問題だろう、と6月の1ヶ月だけ語学学校に通って、わずか40レッスンだけ受けた状態で、7月にその2週間の講習会に参加しました。つまり、ボンジュールとか挨拶が言える、動詞は20個くらいしか習っていない、しかも現在形と単純な過去だけという状態。

1週間ずつ別々の先生だったのですが、特に最初の週の先生はほとんど英語を話さない方で、しかもパリ高等音楽院名誉教授というハイレベルの歌手。もう70歳代なのにすごい声が出ます。合唱団で歌っていた程度の私など及びもつかない先生だったのですが、生徒が6名のとってものんびりした、ヴァカンスを楽しむのを兼ねた講習会だったので、しょうがないわね、と教えていただきました。といっても彼女が「しょうがないわね」とフランス語

で言ったと理解したわけではなく、何となく雰囲気から察知したわけですが。

実際のところ、話だけを聞く場面ではほとんど何もわからないのです。フランス人は一般的にしゃべり好きですが、歌手という人たちはそれに輪をかけてしゃべり好き。2時間かけてゆっくり取る昼ご飯の最中も、料理が来ないときに急かすことなくずっとしゃべりつづけています。私は大人が集まる昼食会に連れて行かれた幼稚園の子どもみたいな状態で、2週間の間毎日2時間、何もわからない食卓での会話を聞き続けました。もちろん夕方には音楽の講義も毎日3時間あって、それこそまったくわからず、ひたすら録音しながら、大人の用事が終るのをおとなしく待っている子どものようでした。

歌のレッスンの時は、実技が入るのでまだわかるのです。日本でも多少声楽のレッスンを始めていたこともあって、何をすればよいか、どこが悪いといわれているのかなどは、なんとなく雰囲気で大体理解できました。生徒の中に1名アメリカ人でフランスに住んで、プロの歌手として仕事をしている人がいて親切に通訳してくれたことも大きな助けで、SISでの音楽の授業では、いつもみんなこんな気持ちでやっているのかなあと思いました。

それから、そこで聞く他の受講生たちの歌やオルガンの響きは、一つの体験でした。フランスの片田舎の村なのに、村中にたくさん教会堂があり、大小のパイプオルガンがあります。日本で聞くのとはまったく違う響きがします。歌っていても本当に気持ちがよく、こんな所で歌うように作られた音楽なんだなあつくづく感じました。15世紀くらいにたった大きな石造りのカテドラル教会の中に18世紀に作られたパイプオルガンがあって、最後にはそこで受講生のコンサートまでしました。

これが最初の夏だったのですが、そ

(次ページ★に続く)

# SISF in Bali

LynMelville-Rea

Community Service Coordinator at OIS

During the 2005 summer vacation, some OIS parents donated money, time and teaching materials to Payangan High School in Bali. It is hoped that our two schools can work together more in the future. Bali is a culturally-rich, lush, tourist paradise.

It is also home to 3 - 4 million people who earn an average of 7,000 yen a month, and are caught in a cycle of poverty, without access to medical care or education.

---



SISF donates 150,000 yen to Payangan High School. Some of the money donated by SISF parents will be spent on repairing and tiling the toilet facilities.

## How many students are there?

There are approximately 250 students, 50 per class.

## Why don't the students go to the government schools?

The government schools charge students about 700 yen a month for tuition. Payangan high school is a non-profit, private school trying to make education affordable to the less affluent. The parents pay 400 yen a month for tuition.

## What could we do to work with Payangan High School?

Even at 400 yen a month, more than half the children in Payangan area cannot afford to go to high school. If we believe that education is a way to help people escape from poverty, then we could develop a sponsorship program. One school lunch for us would allow a child to go to school for a month.

## What are some other ways we could help?

The students at Payangan High School are undertaking vocational training for work in the tourism industry. They are keen to learn English and Japanese. With the recent



donation from SISF, they now have 2 CD players and class sets of 5 textbooks to study English. It would be great to have you work with the students on these materials or to develop a course to study Japanese.

## Can SISF students go to Bali?

Yes. OIS is developing a one week exchange program for SISF high school students. The students at Payangan High School would organize activities such as Indonesian language, wood carving, painting, Balinese dance, mountain climbing, and white water rafting. SISF students would offer English, Japanese and computer lessons in exchange.

---

For more information, please contact Lyn Melville-Rea, community service coordinator at OIS.

## (★前ページの続き)

の後「ここでやめたらもったいない」と決意して、語学学校に週1回、1年に数ヶ月程度細々と通いつづけ、毎年夏にフランス通いをしてもう5年になりました。語学学校では、余りべらべらしゃべることも出来ず沈黙しがちで、単語もちっとも覚えないうし、文法事項はすぐ忘れる。ただ個人授業なので、予習だけはしておかないとどうしようもないので、何とか辞書だけは引いていくという状態。

でも、仕事は忙しくて時間もかけられないし、もう年なんだからしょうがないと開き直ってやっていたら、毎年1年前よりはよくなっていくのです。以前は、英語じゃないと窓口で聞き返されたときにわからなくてパニックに

なっていたのに、もうフランス語で電車の切符を買うのも怖くなくなり、この夏は、ずいぶんと人の話がわかるようになりました。同じ受講生の女の子が、「実はね、昨日決心して電話してボーイフレンドと別れたの。おかげで今日はちっとも歌う気になれなくて全然ダメだった」なんて話してくれるのを聞いてあげたり、1年前には1人で来ていた女性に「そうなの。彼、素敵でしょう？実はまだあってから3ヶ月。彼には別れた奥さんとの間に女の子がいるんだけど、とってもしいい人で、、、」と一緒にやってきたボーイフレンドの自慢をされたり(という話題がいかにもフランス的かもしれませんが)、ともかくわかるようになって

ている自分を発見し、歌の方も多少は進歩して、フランス語と音楽を満喫してきました。

いや、ほんとにこの年でもこれだけできるようになるんだったら、もっと10代の頃にはがんばっていたら、と思わなくもないですが、今までのICUやSISでの日々があったからこそ、今こんな風に楽しく学べるのかもしれない。皆さんも、やってみよう、と思った時がきっとチャンスなのです。自分に才能があるかないかとか、もうこんな年齢だからとか、そういう問題ではなく、ともかくやってみることが大事なのです、きっと！

# バイリンガル通信

## 子供のバイリンガリズム

難波和彦

英語科

バイリンガル=二つの言語を話す人でも、片方の言語のほうが、もうひとつの言語より強いことのほうが、普通です。生まれてから自然に獲得した言語を第1言語(L1)、それより遅れて習得した言語を第2言語(L2)と呼びます。L2を学び始める時期は、個人によってさまざまであって、大人になってからの場合もあるし、中学生になってから、人によっては2-3歳から、と様々です。中には、どちらの言語がL1・L2ということを決めるのが難しい場合もあります。例えば国際結婚をした家庭に生まれて、父親と母親が最初から、子供に別々の言語で話しかけた場合、(一親一言語One Parent One Languageの原則と呼ばれますこれ以降OPOLと省略)両方の言語をL1とよぶべきだと、ベルギーの学者De Houwerは提唱しています。両方がL1であっても、住む場所、どの学校に行くか、家族のほかの構成メンバーなどによって、そのバランスは変化し続けます。

では生まれたときから二つの言語=L1に触れる子供は、二つの言語を最初からはっきり区別して、それぞれの言語のシステムを習得していくのでしょうか？それとも段々と、成長するにしたがって、二つの言語を使い分けるようになるのでしょうか？1978年にVolterra & Taeschenerという学者たちが、OPOLで生まれたときからドイツ語とイタリア語で育てられているバイリンガル児の2言語習得について、3段階モデルを発表し、一つのシステムから始まって、段々と二つの言語システムに分かれていくという説明を試みました。簡単にいうと、次のようなものです。第1段階：二つの言語は区別されなくて、入り混じった状態になっている。第2段階：単語については、二つの言語間で分けられているが、同じ文法ルールを使っている。第3段階：二つの言語・文法を分けて使うことができる。この説は発表当時影響力のあるものでしたが、De Houwerが1990年に、これに対する反論を発表しました。それはSeparate Development Hypothesis(分離発達仮説)

とよばれるもので、バイリンガル児は、最初から二つの言語を区別することができ、単語・文法ともにそれぞれの言語で発達していくというものです。その後、90年代以降に、De Houwerの説を支持する研究結果が次々と発表され、二つの言語をミックスして使う=コードスイッチングについても、ただ混ぜているのではなく、何らかの規則に従っているようだ、ということがわかってきたので、うまれてすぐに二言語に触れる子供は、“二つの言語を最初から区別している”と言えそうです。

スイスの学者Grosjeanは、3段階モデルの問題点を“言語モード”という考えから、説明しています。バイリンガル人は、二つの言語を使うときに、1言語モードと2言語モードという二つのモードがあり、モノリンガルの人と会話をするときには、一度にひとつの言語が活性化している状態=1言語モードになっていて、他のバイリンガルの人と会話をするときには、二つの言語ともに活性化している状態=2言語モードになっているということです。例えば、バイリンガル児が、英語を話す母親に向かって、“Mummy I'm hungry”といて、すぐそのあとに、同じ部屋にいる父親に、“おなかすいたよ”といった場合は、1言語モード、つまり英語モードから日本語モードに切り替えています。同じ子供が、自分の弟に向かって、“Look I made もっとあたらしいロボット”といった場合は、2言語モードになっていると考えられます。ある子供の2言語モードでの発言だけを見ると、ふたつの言語を“混合”しているように見えます。Grosjeanは、Volterra & Taeschenerの3段階モデルは、子供の2言語モードでのデータだけを見た結果ではないか、と述べています。

1親1言語の原則に従って、バイリンガルの子供を育てている親であっても、自分では気づかないうちに子供が2言語モードを使うことを促している場合があります。アメリカの学者Lanza(1997)は、ノルウェー語と英語で育てられている2

歳の子供のデータから、言語使用についての親のストラテジーを、次のようにまとめています。例えば、OPOLの原則で育てられている日英語バイリンガルの子供が、本来日本語で話すべき親に英語を使ったとします。その場合に、1-英語はわからないので、日本語で言いなさい、と言い直しをさせる。2-それは日本語でこう言おうとしたの？と質問をする。3-子供の言った英語を日本語で言ってみせる。4-子供の言った英語を理解し、そのまま親のほうは日本語で会話を続ける。5-親が日本語と英語のコードスイッチングをしながら話をする。という5種類のストラテジーがあり、1,2に近いストラテジーをよく使っていると、二つの言語をはっきりと分けて使うことをバイリンガル児に促し、4,5に近いストラテジーを使っていると二つの言語を同時に使うことを促すことになる、というものです。私自身、子供に対しては、生まれてからずっと、OPOLの原則に従って、話をしていますが、イギリスに1年間住んだときには、私が日本語で話しかけても、子供が英語で答えるようになってきて、そのとき、そのまま日本語で話をし続けました。この会話のパターンが当たり前になって、日本語を話さなくなりました。日本に帰ってきてから2ヶ月ほどは、このパターンが続きました。Lanzaのいうストラテジーの4にあたることが起こったと考えられます。

コードスイッチングは、子供のバイリンガリズムでは、二つの言語を分けずに“混ぜてしまっている”例として、(例えば上記の3段階モデルの第2段階)よく使われます。しかし、多くの大人のコードスイッチングがそうであるように、子供もある程度ルールに従ったコードスイッチングをしていることをLanzaの研究は示唆しています。Lanzaのデータにある2歳の子供は、Myers-ScottonのMLFモデル(インタカルチュアNo.91, 92, 93および千里国際学園研究紀要第9号第10号をご覧ください)が説明するよう

(次ページ★に続く)

# 12 SIS students pass IB English exams

Peter Heimer

*OIS IB Coordinator, English*

Some SIS students and parents may not know about the academic course of study followed in grades 11 and 12 at OIS. The OIS curriculum in these final two years is called the International Baccalaureate (IB) Diploma Programme. The Diploma Programme (DP) is an international pre-university course of study that leads to examinations. It is designed for highly motivated students aged 16 to 19 in the final two years of high school. The DP curriculum is designed with the aim of developing in students the ability to reason for themselves rather than merely accumulate facts. It provides a thorough education in a broad range of subject areas. It aims to enhance awareness of our common humanity, to encourage a sense of social responsibility, and to prepare students for higher education. It allows students the freedom to pursue their own needs and interests in a properly balanced education. In short, it is both a structured programme that offers a strong general education and a flexible programme that acknowledges the particular interests of individual students.

There are more than 1300 IB world schools in over 115 countries. In the IB Asia-Pacific (IBAP) region, there are about 120 schools offering the IB diploma programme (IBDP). In Japan and South Korea, there are eleven schools offering the IBDP, all of which are members of the Association of IB Schools in Japan and Korea (AIBSJK). OIS is the first school in Japan to offer all three IB programmes: Primary Years Programme (PYP), Middle Years Programme (MYP) and Diploma Programme (DP). This is an important distinction for OIS.

Some SIS students and parents (and teachers) may not realize that SIS students have a chance to study part of the IBDP. It is an exciting opportunity that very few students in Japan have. In fact, in May 2000, eight SIS students became the first students at a Mombusho-recognized school in Japan to take an IBDP exam when they sat for the English A2 exams. Those pioneer students, if you'd like a bit of SIS history, were Chie Ebara, Kanako Kobayashi, Ai Kawano, Hiroyuki Ota, Masako Ota, Reiko Takada, Ken Matsuda

and Satoshi Yamaguchi. Since then, over 40 other SIS students have taken IBDP exams.

The SIS IB tradition continued this year in May when twelve more SIS students took IB English examinations. Two students—Fumi Yoshida and Mai Takahara—took the English A2 exams, and ten students—Ha Yon Che, Ayaka Cooke, Saaya Fuchiguchi, Yoko Kamino, Rina Lee, Yaya Makino, Yu Matsuoka, Saori Nishida, Yuki Sogabe and Asuka Tanabe—took the English B exams. All were successful in their exams.

The English A2 and English B students studied in their IB courses for three trimesters with Mr. Heimer and Mr. Ray. All worked very hard and have received highly coveted IB certificates. Congratulations to these SIS IB students.

For more information about the IBDP, please contact Peter Heimer, OIS IB Coordinator, at [pheimer@senri.ed.jp](mailto:pheimer@senri.ed.jp), or visit the IBDP page on the school website at <http://www.senri.ed.jp/OIS/IBDP/index.htm>, or visit the IBO public website at [www.ibo.org](http://www.ibo.org).

(★前ページの続き)

に、基本的にはノルウェー語をMatrix Language 母体言語として、文法的な枠組みを作り上げ、そこに英語の内容語(名詞・形容詞・動詞など)をEmbedded Language として挿入するパターンをとっています。

今回は: 1) うまれてすぐに、ふたつのL1にふれて、育っていくバイリンガルの子供は、最初から二つの言語のシステムを別々のものとして習得していく、ということ、2) 一言語モードのときには、二つの言語をはっきりと分けていることがわかるけれど、二言語モードのときには、二つの言語システムが活性化しているので、二つの言語を同時に使うこともある、3) OPOLで育てているつもりの親で

も、二言語モードの使用を促していることがある、4) しかしコードスイッチングのパターンは、大人と同様に、ルールに従ったものになっている、といったことについて書きました。今後さらに年齢があがってからのL2の習得などについても、書いていきたいと考えています。

参考文献

東昭二 (2000) バイリンガリズム 講談社現代新書  
Myers-Scotton (2006) Multiple Voices: an Introduction to Bilingualism.  
Grosjean, F. (2001) The bilingual 's language modes. In J. Nicole (ed.) One Mind, Two Languages: Bilingual Language

Processing. Oxford: Blackwell, 1-25  
De Houwer, A. (1990) The Acquisition of Two Languages from Birth: a Case Study. Cambridge: Cambridge University Press.  
Lanza, E. (1997) Language Mixing in Infant Bilingualism. Oxford: Clarendon Press  
Namba, K. (2004) An Overview of Myers-Scotton's Matrix Language Frame model. 千里国際学園研究紀要 第9号  
Namba, K. (2005) What is code-switching? 千里国際学園研究紀要 第10号  
Volterra, V. & Taeschner, T. (1978) The acquisition and development language by bilingual children. Journal of Child Language 5: 311-26

# 学年だより

中等部1年生(7年生)

## 充実した秋学期を

合志智子

3組担任、情報科

2ヶ月間の長い夏休みを終えて、7年生は真っ黒に日焼けしたり、身長がぐつと伸びたり、元気一杯です。飴谷英晃くん(1組)、野坂友紀さん(1組)、林ちさとさん(2組)、渡辺華さん(2組)の4名を迎え、秋学期をスタートしました。

7年生は夏休みの目標として、「ふだんできないことを1つする」、「1日を計画的に過ごす」、「何か家事を引き受ける」、「自分で何か目標をたてる」の4つについて、自分の目標と、達成するための工夫を考えました。そして、秋学期の初日に、その目標について、「夏休みの過ごしかたはどうだったか」の振り返りを行いました。読書、スポーツ、手伝い、宿題、食事作り、掃除などをがんばったこと、映画をたくさん見たこと、楽しかった旅行や学校のキャンプのことなど、いっぱい話してくれました。反面、ついだらだらしてしまって、しようと思っていたけれど、できないまま夏休みが終わってしまったこと、そもそも目標に無理があって達成できなかったことなどもありました。秋学期の目標には、自分で決めたことにむかって、自主的に継続して行けるものを、じっくり考えてほしいと思います。

春学期は、早起きと通学と授業に慣れるのが精一杯で、学園祭もあつと言う間に終わってしまった7年生でしたが、クラブ活動やキャンプを通じて、他学年との交流も深めることができ、SISでの毎日にも慣れてきました。そして、いよいよ秋学期にはスポーツデイがあります。7年生ではスポーツデイ委員を、各クラスに設けました。「ぜひこの委員をやりたい」という3名が、それぞれのクラスで選出されました。今はまだ、学年の色が「赤」と決まっているだけですが、今後、スポーツデイ委員はOIS7年生と連携を取りつつ、リーダーシップを発揮し、クラスを盛り上げていくことができると思います。このスポーツデイやオールスクールプロダクション、クラ

ブ活動などでの7年生のみんなの頑張りを、ぜひ見てみたいと楽しみにしています。

中等部2年生(8年生)

## 自分との戦い

中尾直子

2組担任、保健体育科

MS(Middle School)としての最後のスポーツデイの結果はいかがだったでしょうか。MS最高学年として無事に優勝できましたか？

この原稿を書いているのは、夏休み明けなので、その頃の思い出を基にすこし書こうと思います。

わたしが中学生のとき、休み明けに宿題考査がありました。(SISでもいくつかの教科では宿題テストをやっていると聞いています。)中間考査、期末考査とともに年間の成績にかかわる大事な試験だったのです。当然、範囲は夏休みの宿題ですから、きちんとやっていたらそこそこできるはずでした。というか、全部できて当たり前なのです。休みの初めに7月中に終わらせるように計画を立て、7月下旬には計画が破綻し、ツクツク法師が鳴き始める頃からあせってなんとか形だけは終わらせていました。しかし、試験問題というのはうまくできていて、うわべだけ取り繕っても解けなかったのです。わたしは、毎年、定期考査に比べて宿題考査の席次が2割ほど悪かったのを覚えています。(「毎年同じ失敗を繰り返していたのか。」と、突っ込まないでください。)

幸いなことに、SISでは席次もなく、校内で一斉にする定期考査もありません。各教科で、中間があるもの、期末だけのもの、単元ごとのテストだけのもの、テストはなく課題を与えられるものと、様々な形で総合的に評価が行われています。それは、どの教科も席次をつけるのが目的ではなく理解を定着させるのが目的で、その理解がどのくらいかというのが評価です。友達との競争ではないのです。自分との戦いなのです。8年生の皆さんはそろそろ、どんな勉強が必要か、何をしなくてはいけないかがわかってきていると思います。わたしのように同じ失敗を繰り返さないようにがんばってください。

中等部3年生(9年生)

## 「豊かさ」の秘密を見てきました

野島大輔

3組担任、社会科

千里国際で過ごす6年間の中で、いちばん鍵となる年といわれる、9年生の1年間。学習内容は飛躍的にレベルアップし、集中して対応することが必要な宿題課題が次々と出されてきます。生活態度や行事の運営では、一層の自主自立が求められます。幸い、5月の学園祭では、期待以上の成果を挙げる取り組みができたと思っております。夏休み、果たして自分の時間を上手にコントロールし、それぞれの「夢」に向かって充実した日々が過ごせたでしょうか。9年生の多くの生徒たちが参加した、オーストラリア・ホームステイ・プログラムの振り返りが行われているところです。

スポーツ・デイの準備が、執筆現在、ちょうど始められるところです。学年旅行では、委員の生徒たちを中心に、行き先決定の話合いがいま最終段階です。10月末に、2万円以内の予算で、生徒たちの立案による手作りの旅行を実施いたします。保護者の皆様のご支援とご協力を、どうぞよろしくお願ひいたします。

休暇の間に、ついに念願のブルネイ・ダルサラーム国を訪れることができました。ご存知「東南アジアの宝石」の異名を持つ黄金の国。毎年10年生の比較文化の授業で取り上げていながら、外国人観光客をあまり歓迎してこなかったお国柄のため、なかなか現地取材ができずにおりました。が、今年ついに訪問が実現しました。

「豊かな国」といっても、街の様子は東京や大阪、ニューヨークなどとは大違いで、物静かで落ち着いた雰囲気のある首都のバンダル・スリブガワン。都会的な喧騒はあまりなく、夜はとて静か。モスクや公共の建物の柱や壁の一見地味な装飾が、実は金や宝石のはめ込みだったりするタイプの、しっとりとしたリッチさが持ち味です。まじめなイスラム教徒の人々が、笑顔で働いています。強引に物を売る人もあまり無く、イライラ短気に動き回る人もほとんど見かけません。市場で大型のサルが果物をくすねて樹の上で食べているところを見かけたときには、「ここは、ホントに首都？」とさすがに驚きました。

首都ですらこんな様子ですから、ちょっと郊外に出ると、「樹を一本も切らない」政策が護り続ける熱帯雨林の只中へとすぐに誘われてしまいます。林の中の、先住民族の村へも案内してもらったことが出来ました。大家族生活(ひとつの家に90人!)の風習を守る「ロング・ハウス」は一見粗末な造りですが、部屋の中にはデジタル家電やインターネットが。どんな僻地にも、ヘリコプターで「フライング・ドクター」が往診に来ます。伝統的な生活習慣を維持する水上集落の家庭にも、衛星放送のTVやドルビー・サラウンドのステレオなどが、普通に置かれてありました。「自然と伝統と文明の共存」という贅沢さが、この国のシークレットと知らされました。

訪問した学校では、「ご覧のように、ひとクラスあたりの人数が多くて(30人くらい)、日本の学校からの方にお見せするのは恥ずかしいのですが」という先生や、「一度でいいから日本のカプセル・ホテルに泊まってみたい」という生徒たちの発言に接し、ちょっと答えに詰まりました。行儀よく、のんびりと、生き生きとしているというのが、ブルネイの子供たちの印象です。

所得税はなく、医療と教育(留学含む)などは基本的に無料で、年金制度や「障害」者の補助制度などもあるそうです。米や砂糖などの基本食料には政府の補助があり、土地ですら国からタダで提供される場合もあるというこの国。これらの富を生み出した石油資源が消耗しつつあるのは事実ですが、海外観光地資源の買収や海外競馬レースへの出場など、ビジネスマンとしても優秀な国王が次の手を打っています。公務員を無料で海外旅行に行かせる制度は、世界の様々な国の長所を学ばせるためとか。議会や憲法が事実上停止している独裁政治でありながら、人々は国王が大好きで、ブルネイの政治にはとても満足している、と答えます。また、いくら治安が良いといっても、国王の誕生日に、外国人観光客の私でもお車の至近距離から写真が撮れる、という楽観的な警備の様子には驚きました。年に一度、国王と国民との握手会もあるそうです。

授業では、「ではさて、一人当たりGDPがブルネイの2倍の日本では、お金をいったいどこに使っているでしょう？」

という出題をして、毎年生徒たちを困らせてしまうのですが、読者の皆様なら、はたしてどうお答えになられますでしょうか。ウィットとユーモアのある模範的なご回答には、ささやかながらお土産をプレゼントいたします。勝手ながら次号の発行日をご応募の締め切りとさせていただきます。多謝

高等部1年生(10年生)

**Working closely together with the OIS**  
Frances Namba

10-3 HR Teacher, English

It was nice to welcome everyone back to school after the long vacation and to hear about your exciting summer adventures! Since September, grade 10 has felt a little empty as we were the only grade not to have any new students join us after the summer. In addition, a few members have left us either to study abroad for a year or transferred to a different school. We wish Saori Shiokawa, Daiki Iguchi, Genta Oozono, Katsuto Kuroda, Lisa Kurner and Yuri Nishie all well in their new schools in the year ahead.

Although our numbers have dwindled, some of the emptiness has been filled by working closely together with the OIS grade 10. Students in both schools made a conscious decision to make an effort to work together more efficiently than in the past and it has been encouraging to see you discussing all the important issues regarding sports day together. Watching you together and seeing you all communicating in English and Japanese and trying so hard to make sure that everyone feels included has been heartwarming. This is what our school is all about and I feel it has been an important learning experience for you all. Well done grade 10 students!

高等部2年生(11年生)

**思い出に残る学年旅行を**  
田中憲三

4組担任、数学科

秋学期から、4人の編入生を新たに迎えました。1組に別所有依さん、3組に辻梨沙さん、4組に田丸雅一君、5組に西尾達也君です。自分が入学・編入して

きたときのことを思い出して、声をかけてあげたり、彼らが早く学校になじめるように、協力してあげてくださいね。また1年間の留学を終えて、堂腰紗千さん、深井瑛子さん、三浦森君、一階ころさんが帰ってきました。おかえりなさい。学年全体がますますにぎやかになってきました。

9月から、ホームルームの時間を使って、来年3月の学年旅行に向けての取り組みを本格的にスタートさせました。夏休み中に各グループが旅行先についてのリサーチを行い、9月中旬に行われるプレゼンテーションを経て、いよいよ行く先を決定する段階までできました。行き先決定後、さらに半年をかけて、自分たちの希望と種々の条件をいかに摺り合わせていか、旅行社との打ち合わせ、保護者の方へのプレゼンテーションなど、いくつもの手順を踏んでいく中で、たくさんのお話を学びます。自分たちの旅行です。思い出に残る旅行をみんなでデザインしていきましょう。

高等部3年生(12年生)

**NikMijia Republic**  
福島浩介

2組担任、国語科

ニクミジア共和国 南太平洋に浮かぶ面積約50m<sup>2</sup>の島国 人口20人 公用語 日本語、英語

三ヶ月前の話になってしまいますが、今年の学園祭は、テーマが Sixty's & Seventy's ということで、高三のブースでは「万博」のコンセプトでクラスごとに国を決めそれぞれの国の料理を販売しました。独自にアトラクションも準備し、三波春夫氏の万博音頭ならぬマツケン・サンバを演じるなど、本格的(?)な出店ができたと思います。

われらが二組は、「ニクミジア共和国(非常にベタですね)」という架空の国を作り上げ、その代表的な料理(笑)である「ニック」と「ミジアン」を販売しました。もちろん、誰も知らない国ですから、ブースには国旗、国の歴史・制度、発見者、初代からの大統領の肖像なども展示されました。この「冗談を本気で冗談でやる!」という姿勢が、私はとても好きです。遊び心を忘れない上で、真剣に取り組むとでも言い換えられると思うのですが、クリエイティブさと、それを

実現・具現化する知識・技術と、ユーモアのセンスが一体となった、これは、とても高級な姿勢かと思われ、「イカしてる」のです。ほかのクラスの出店もセンスにあふれるもので、こういうのって、周りの人々を上機嫌にできると思うのです。もちろん、やっている本人たちも「冗談」でやっているわけですから上機嫌です。

今流行の、齋藤孝氏の著書に、「不機嫌でいいのは、小さな子供が天才だけ」という一節があったのですが、世の中、割合、不機嫌な人が多い。氏は、不機嫌を装わなければ、馬鹿っぽく思われるという雰囲気があるというようなことを書いていますが、これは、世の人々に「真剣さ」と「上機嫌」さは同居できないという思い込みがあるということでしょう。でも、高三諸君の学園祭での成果を見ていると、上機嫌で真剣にやれば、成果はより大きくなるということが証明されているような気がします。

さて、この時期、この枕で、賢明な皆さんはこの駄文の本題が何になるかはうすうす感じていらっしゃるかもしれませんね。そう、高校生活のまとめのこの時期、そして、次なるステージへの準備の鼓の時期、上機嫌さを持って真剣に、各自のしたいこと、そしてすべきことに取り組んでください。二組の教室に掲示してある「二組の掟」にも書いてありますが、「気ばかり使ハズ頭ヲ使フベシ」であります。「～だったらどうしよう」などよくよくよしても何の解決にもなりませんよね。何か形になることを積み重ねていきましょう、しんどくても上機嫌さを忘れずに。30分間、「～だったらどうしよう」と悩んでも滅入ってマイナスなだけです、単語を覚える、本を読む、数学の問題にとりくむ、そして気分転換に表を走る、音楽を聴く、etc、これは最低でも0(ゼロ)、たいていはプラスになります。数ヶ月のタームで考えると0で無駄なことのようにも、五年、十年の先、プラスになるかもね。

担任の先生方はじめ、進路情報室の先生方、授業を担当して下さっている先生方のサポートの体制は万全です。皆さんは、自分のしたいこと・すべきことを上機嫌にやってください。上述のように皆さんに、その素養は十分にあるし、実践もあるのでね。

## 9月編入生紹介

アドミッションズオフィス

学年	姓 名	Last	First	性別	在留国
07	飴谷 英晃	Ametani	Hideaki	M	アメリカ
07	野坂 友紀	Nosaka	Yuki	F	香港
07	林 ちさと	Hayashi	Chisato	F	OIS(シンガポール)
07	渡辺 華	Watanabe	Hana	F	OIS(アメリカ)
08	粘 家甄	Nien	Jia-Jen	F	中華学校(台湾)
08	新田 祥絵	Nitta	Sachie	F	韓国
08	山中 幸樹	Yamanaka	Koki	M	カナダ
08	土居 可弥	Doi	Kaya	F	アメリカ
09	谷本 舞莉	Tanimoto	Mayuri	F	ニュージーランド
11	別所 有依	Bessho	Yui	F	シンガポール
11	辻 梨沙	Tsuji	Risa	F	アメリカ
11	田丸 雅一	Tamaru	Masakazu	M	ロシア
11	西尾 達也	Nishio	Tatsuya	M	アメリカ
12	武島 千恵	Takeshima	Chie	F	中国
12	角田 真理愛	Tsunoda	Maria	F	メキシコ
12	吉田 聖子	Yoshida	Seiko	F	アメリカ
12	原 航太郎	Hara	Kotaro	M	オランダ

## SIS学校説明会のお知らせ

アドミッションズオフィス

第5回10月22日(土) 14:45 - オープンキャンパス形式  
第6回11月12日(土) 10:00 - 入試要項説明。個別相談有り。

30分前より受付開始。いずれも約2時間の予定。個別相談は希望者のみ。予約不要。上履き不要。過去入学試験問題集(一般生徒用)販売。

説明会当日の個別相談は、人数と時間の関係で1人当たり15分程度になります。個別のご相談は随時受け付けておりますので、ご希望の方は入学センター(TEL 072-727-5070)にお申し出下さい。

あれ、最初は、ニックとミジアンのレストランを紹介しようと思っていたのですが、紙幅の都合もありこの辺で。(本当は書き始めたのですが、どっちの中に何を入れたかはっきり思い出せなくなってしまい、切が明日なので、調理してくれた諸君に聞きに行く暇もなく...(笑)

湿らせたライスペーパーの中にひき肉とかジャガイモとかチーズとか、ドリトスを砕いたものとかをいれて巻き、フライパンでソテーするって感じだったと思うのですが...

お後がよろしいようで。

# 英検1級に3名合格

## 英語資格試験

水口 香

英語科

暑い夏がようやく過ぎ、さわやかに秋学期が始まりました。多数の生徒から、この夏に受験した英語資格試験の報告がどんどん寄せられています。今回はこれまでに報告があった2005年度第1回英語検定試験の合格者をご紹介しますことができます。

英検1級獅子倉玲奈さん(12年)、伊丹夏子さん(11年)、左海美鈴さん(11年)が、みごと合格しました。おめでとうございます。更なる飛躍を楽しみにしております。また、その他の級でも幅広い学年から合格者が出ています。

- 1級 3名
- 準1級 4名
- 2級 14名
- 準2級 2名
- 3級 1名

また、国連英検A級2004年度第2回大村ジェニファー沙也子さん(12年)、2005年度第1回田浦海君(12年)合格の知らせも届きました。合格者の皆さんおめでとうございます。今後の健闘をお祈りしております。

## ドイツ語検定

桂木 忍・Ralf Ibald

ドイツ語

SI Sで第二外国語を受講しているみなさんにとって、学外での検定試験やスピーチコンテストは自分の実力を試すいい機会です。ドイツ語では、この春から夏にかけて以下のみなさんが学外でドイツ語を試す機会に挑戦しました。

SD 1 (Start Deutsch 1 : 注1参照) 合格  
手木マリア (11年生)

松岡優 (12年生)

ドイツ語検定(注2参照) 3級合格

松岡優

全国高校生ドイツ語スピーチコンテスト(獨協大学主催 : 注3参照) 本選出場  
手木マリア

ドイツ連邦共和国政府による高校生の招聘事業(注4参照) 参加  
手木マリア



獅子倉玲奈さん(12年)



伊丹夏子さん(11年)



左海美鈴さん(11年)

すばらしい成果ですね。これからもがんばってください!

注1 : EU加盟国で使用されている言語には、欧州評議会の定めた語学力評価基準でレベルを決める流れがここ数年で定着してきています。ドイツ語もその例にもれず、欧州評議会基準に従って語学検定のレベルを設定しています。SD 1 (Start Deutsch 1)は、ドイツ語A 1レベルを修了したことを証明するものです。ドイツ語A 1レベルとは、85-170時間程度のドイツ語学習を前提とし、日常生活の場面で、単純で短いドイツ語を使って意思の疎通ができることが求められます。

SD 1以外にもレベルが上がるにつれてそれぞれの検定試験があります。これらの検定試験は世界中で行われており、合格者はドイツはもちろん欧州全体あるいは世界中で自分の語学力を証明することができます。日本では東京、大阪、京都のそれぞれのドイツ文化センターで年に2回ほど行われています。

注2 : ドイツ語検定は、実用英語検定(英検)と同じく日本国内で行われる日本人のドイツ語学習者を対象とした語学検定です。4級から1級までのレベルがあり、難易度は英検のそれとほぼ同じです。年に2回、日本全国で実施されます。

注3 : 獨協大学主催の全国高校生ドイツ語スピーチコンテストは、高校生だけを対象とした唯一の全国的なドイツ語によるスピーチコンテストです。基礎レベルから帰国生までさまざまなレベルで課題やスピーチを競います。予選を通過した人は本選に招待され、さらに本選で

賞をもらった人にはドイツでのドイツ語研修などすばらしい副賞が用意されています。

注4 : ドイツ連邦共和国政府による高校生の招聘事業は、ドイツ連邦共和国外務省が外国のドイツ語の優秀な高校生を2週間あるいは4週間のドイツ国内の研修旅行に招待するという事業です。

## <ドイツ語追加情報>

11年生浅芝理人君が、ドイツ語の授業を受講していませんが、ドイツ語検定3級に合格しました。11月にはまたドイツ語検定の試験があり、ドイツ語の教室の前にポスターで掲示してあります。願書も相当数確保してありますので、ドイツ語受講生でない生徒で興味がある人、願書がほしい人は桂木先生に連絡して下さい。

## 中国語検定

また、12年生の石井雅也君が中国語検定 Advance Level B級(2005年5月)に合格したとの連絡がありました。おめでとうございます。

## 新聞に掲載されました

8月7日付朝日新聞の日韓関係をテーマにした「紙上特別講義」のコーナーに、高等部3年李利奈さんの文章が掲載されました。これは、夏休み中に利奈さん自身で取り組んだ課題です。このコーナーで取り上げられた話題にそって、「宿題」の「答案」として投稿をしたものでした。掲載された文章を紹介し

### 「宿題」

日本にとって韓国は重要かどうか。その理由を500字以内で述べよ。

### 「答案」

アジアの未来担うパートナー

李利奈さん(17才)

=千里国際学園3年、大阪府堺市

在日3世に生まれ、日本文化の中で育った私にとって、「韓国」は少し遠い祖国でした。しかし、日本と朝鮮半島との文化交流が以前から盛んに行われてきたこともあって、両国間の強いつながりを感じ、祖国との距離が少しずつ自分の

中で縮まりました。

今や日韓両国は、互いに重要な隣国関係に他ならないと考えます。日本と韓国は今後、アジアの未来を一緒に担う信頼あるパートナーでなければならないからです。リーダーシップを兼ね備える両国の関係が不安定では、アジア諸国全体の明るい未来もない。両国にはアジアの「共生」をもっと認識し、現状問題への解決方法を導き出してもらいたいと思います。

私は両国の「架け橋」として、日韓の相互理解をもっと深大なものへと発展させたいという思いから、日本と韓国、両国間の幅広い市民交流の場を両国が協力して意欲的に促進することが必要であると考えます。

そして、日韓両国がお互いに「重要な存在だ」という意識を共有できるように関係が創生されることを心から祈っています。



本校は、1998年度より、それまでの4学期制から各学期同授業日数の3学期制(60日×3)へと移行しました。4月～6月を春学期、9月～11月を秋学期、12月～3月を冬学期と呼んでいます。

また1999年度には、大阪国際文化中学校・高等学校(OIA)から千里国際学園中等部・高等部(SIS)へ校名変更。同時に、中3以上の授業は一部を除いて「学期完結制」となり、高等部では学期ごとに単位が認定されるようになりました。このため、各学期で履修科目、時間割が変わります。

## 癒(い)やし

弥永千穂

保健室

「癒やし系」「癒やされる」という言葉はよく聞かれるようになりましたね。本来は病気、けがを治すこと、苦痛や悲しみをなくすことを意味します。今は安らぐ、ほっとするというような意味で頻繁に使われているように思います。保健室には「癒やされにきた。」「癒やして。」と言ってくる生徒もいます。お友達の前では元気にテンションをあげているのでしょうか、一人になってすこし静かでほっとできる場所を求めているのかもしれませんがね。もしくは私とのおしゃべりが癒やしのようです。(これは嬉しいことですね。)みなさんは「癒やし」と聞いて何を連想しますか?自分がほっとできる場所は?自然に笑顔がこぼれる時は何をしている時?心が静まる時は?何色を見ると、使うと気分が落ち着く?毎日追われるようにあわただしいとしっかり呼吸もしないし、身体は緊張したまま、心もとげとげになっちゃいます。すこし意識してゆっくり呼吸をして、自分をみつめてケアしてあげることが大切に

なっていると思います。そうすることで忙しかったり、ストレスを感じたりしても心も身体もうまく乗り越えていけるのです。ぜひたまにはお友達とこんな話題もしてみてください。脳は本当に体験していなくても楽しく話すだけで実際体験しているようにリラックスできるらしいですよ。ご報告:学校にAED(自動体外除細動器)を1台設置しました。AEDとは心停止の時に電気ショックを与える器械です。心臓が止まると1分毎10%ずつ命の助かる確立が下がると言われています。つまり救急車を待っている間に命の助かる可能性はかなり低くなってしまいます。そのため、昨年夏からAEDの使用が一般の人にも認められ空港、公共施設、学校などですぐに使用できるように設置されるようになってきました。みなさんの安全のために学校にも準備をしました。AEDという言葉覚えておいていただけると嬉しいです。

# 囲碁全国大会出場

佐伯昭洋

囲碁部コーチ、数学科

8月17日(木)に行われた第2回文部科学大臣杯小・中学校囲碁団体戦全国大会に、本校から看舎瑞穂さん(7年)、石神宥真君(9年)、池田健治君(7年)の3名が出場しました。各都道府県の代表校の選手・保護者・引率者がひしめく中、会場は終始すごい熱気に包まれていましたが、生徒達は雰囲気飲み込まれることなく、いつもの様に対局に臨めたようです。残念ながらあと一步の所で本戦(決勝トーナメント)には届きませんでしたでしたが、生徒達にとって貴重な経



験になったと思います。

最後になりましたが、今回の大会に向けてあらゆる場面でバックアップしていただいた看舎さん、石神君、池田君の保護者の方々に厚く御礼申し上げます。

結果:

第一試合:本校3 - 0 種市中(岩手)

第二試合:本校0 - 3 見明川中(千葉)

[本戦出場、準優勝]

第三試合:本校2 - 1 手代木中(茨城)

# English Drama Festival

宮地美玲

中等部2年

去る6月26日、S I Sのシアターにて、E D F (English Drama Festival)が行われました。毎年行われているE D Fも今年で13回目を数えます。今回の出場校はS I S E D Cと長野高校E S Sの皆さん。私たちE D Cメンバーは"Escape to the Blue Planet"という劇を演じました。

今回の台本 "Escape to the Blue Planet"に決定したのは今年の3月。様々な台本の中から、宇宙と地球を舞台に個性的なキャラクター達が一波乱起こし宇宙を救う、というあらすじのS Fがテーマの台本が選ばれました。皆が進級した4月には配役も決まり、練習を積み重ねてきました。

去年と比べてシアターでの練習時間が少なかった為、教室での練習とシアターでの練習日を効果的に使いながら基礎練習、台詞の発音練習や感情移入、マイムや表情の練習を主として、活動を行ってきました。

しかし、練習はそう簡単ではありませんでした。今回の物語に出てくるキャラクター達は日常生活では目にすることの

できないような個性派ぞろいで、それぞれのキャラを作り、それを表現するのにとても悪戦苦闘しました。また、英語も去年と比べて難しかったし、何よりも数々のマイムに苦労しました。どうやったらキャラクターの言いたいことがお客さんに伝わるか、どんな風にすれば見やすいか等、いろいろなことを試行錯誤しながら練習を積み重ねてきました。

また今回私たちは、練習が終わればそれぞれ自己評価やお互いの演技や英語などについての反省会をして、次回の練習に生かす努力をしてきました。いいところも悪いところもお互い分かり合えたので、この方法はとても良かったと思います。また来年の部活動でもこの方法を使い効果的に練習が出来たらいいな、と感じました。

そして、私たちは裏方にも力を入れました。マイムでは表現し辛いものを各自持ってきたり、借りてきたり、時には作ったりして小道具を準備し、照明や音響なども助っ人さんに協力してもらいました。そのお陰で、今回の劇はより良い劇になったに違いありません。劇中ではつつい演技している人に目が行ってしまいがちですが、この小さなことにも一



生懸命取り組み、活用できたことも私たちの劇の成功につながったと思います。

いろいろと大変なこともあったけれど、みんなで楽しく練習できた時間はあっという間に過ぎてしまいました。

ついにやって来たE D F当日。本番ではみんなで力を合わせてなんとか劇を成功させることができました。楽屋でみんなで楽しく過ごしたこと、少し緊張しながらも演技が精一杯できたこと、また長野高校の人たちとの交流なども私たちにとって、忘れられないものとなりました。

いろいろ難しい問題もありましたが、みんなで楽しく部活動ができたことは本当に良かったと思っています。忙しい中わざわざ手伝いに来てくれた裏方のみんな、劇の本番を見に来てくれた人たち、そして、E D Cのみんな、本当に本当に有難う!!!

# オールスクールプロダクション初の二本立て

上演は12月1日、2日、3日

大迫奈佳江

プロデューサー、日本語科

## 夕鶴 & Brundibar

今年度のオールスクールプロダクションは、木下順二の戯曲を團伊玖磨がオペラ化した『夕鶴』と、第二次世界大戦中テレジン強制収容所で、人々に希望を与えるために作曲・上演された、ハンス・クラウサの子供のための歌劇『ブルンジパール』です。日本の演劇を代表する作品を紹介できることは素晴らしいのですが、『夕鶴』の登場人物は少なく、4人と数名の子供たちだけです。一方『ブルンジパール』は、上演時間は30分と短いのですが、小学部から高等部までの生徒が大勢参加できます。また、どちらの作品もたくさんの楽器を必要とします。ということで、二本立てに踏み切ることにしました。公演は今年の12月1日、2日、3日です。『夕鶴』は日本語公演・英語字幕、『ブルンジパール』は英語公演・日本語字幕となります。(ストーリー等、詳細については、学校のホームページ<http://www.senri.ed.jp/ASP/>をご覧ください。)

6月に『夕鶴』の主な配役とオーケストラメンバーがだいたい決まりました。『ブルンジパール』と『夕鶴』の子役のキャスティングも、9月9日(金)に発表されました。練習日は、『ブルンジパール』のキャストが火・木、『ブルンジパール』のオーケストラが金曜、『夕鶴』のキャストが、月・水・金、『夕鶴』のオーケストラが火・木です。今回は、初めてだけれどチャレンジしてみようという生徒が多く、みんなの活躍がとても楽しみです。プロダクションスタッフの申し込みは、9月下旬になります。お知らせはシアター前の掲示板でご確認ください。

### 【作品詳細】

#### 夕鶴について

古来伝承されてきた日本の民話には哀愁を帯びたものが数多くありますが、その中でも「鶴の恩返し」は、命を助けてくれた恩人に一途な思いを寄せる鶴と、

それを悪用する人間のエゴが対照的に描かれて、涙を誘う物語になっています。この民話を題材にした木下順二の戯曲をオペラ化した「夕鶴」は、團伊玖磨の出世作であるとともに、我が国を代表する歌劇として1952年の初演以来、不動の地位を確立しています。  
<あらすじ>

むかしむかしの雪深い村。ある日、与ひょうは傷ついた一羽の鶴を助ける。恩返しに鶴は与ひょうの妻、つうとして彼の家に住み着き、自分の羽を織り込んだ千羽織を贈る。運ずや惣どから都に持って行って売れば大金が手に入るとそそのかされた与ひょうは、つうにもっと織るよう強要する。つうは、お金にとり憑かれた与ひょうに落胆するが、千羽織を得ることで与ひょうの心が戻ってくることを信じて、布を織る決心をする。与ひょうは、つうに布を織っているところを「決して覗き見しないこと」と言われていたが、我慢できずに中を覗いてしまい、鶴となって布を織っているつうの姿を見てしまう。翌日、すっかりやせ細ったつうは、千羽織を与ひょうに渡すと別れを告げ、空に飛び立っていく。

#### ブルンジパールについて

チェコのユダヤ人強制収容所=テレジンで約60年前、優れた作曲家ハンス・クラウサが作曲し、収容所の子供たちが上演した可愛い子供たちのオペラ「ブルンジパール」は20世紀の終わり頃発見され世界各地で平和への願いをこめて上演されています。この作品は素晴らしい曲を書いた優れた才能、ハンス・クラウサをアウシュヴィッツに送って非業の死に追いやったファシズムへの無言の抗議にもなっていると言えます。

<あらすじ>

物語は病気のお母さんを助けるために、町で歌を歌ってお金を得ようとした兄妹が手回しオルガン弾きブルンジパールと警官、ブルンジパールの音楽に虜になった町の人達に追い払われてしまいます。子供たちが、犬やネコ、雀の力を借りて町で歌を歌い、感動した通行人たちがお金を兄妹に寄付します。ブルンジパールがそのお金を取り上げようとしていますが、彼は捕まえられてしまい子供たちは勝利の歌を高らかに歌う、というとても明るく、可愛い曲です。中でも「お母さんの歌」はとりわけ美しい曲で思わず心にジーンときます。

### OIS/SIS Music Calendar 2005-6

#### Fall Term 2005

Monday, October 31st - Friday, November 4th - Genkan Concert Series  
November 16th - 20th - APAC Orchestra - Beijing and APAC Choir - Manila

#### Winter Term 2005-6

December 1st -3rd - All School Production - Yuzuru and Brundibar  
Thursday, December 8th - OIS Elementary Winter Concert  
Tuesday, December 13th - HS Holiday Concert (WE; SS; Choir) Maple Hall 6:30 PM  
Thursday, February 2nd - Winter Music Student Recital, 4:00PM  
Thursday, February 16th & Friday, 17th - MS/HS Winter Concerts  
February 22nd - 26th - APAC Band - Seoul  
Saturday, March 4th - SIS HS Graduation

#### Spring Term 2006

Wednesday, April 5th - SIS Entrance Ceremony (MS Performance Band)  
Thursday, May 11th - Spring Music Recital, 4:00PM  
Tuesday, June 13th - HS Spring Concert, Maple Hall, 6:30 PM  
Thursday, June 22nd & Friday, 23rd - MS/HS Spring Concerts, 4:00PM

# トライアスロン全日本ジュニア9位入賞

馬場博史

トライアスロンクラブ顧問、数学科

## ■全日本ジュニアトライアスロン選手権で9位入賞

7月31日(日)岐阜県木曽三川公園でJTU(日本トライアスロン連合)全日本ジュニアトライアスロン選手権長良川大会ジュニア男子B(高校生以上20歳未満 Swim750m, Bike20km, Run5km)にSIS11年生の永田悠太君が大阪府トライアスロン協会の推薦を受けて出場し、9位でフィニッシュ、記録は1:02'10"でした。(以下はJTUの速報です)

2005JTU日本ジュニアトライアスロン選手権長良川大会は、7月31日(日)、岐阜県木曽三川公園特設コースで行われた。午前8時ちょうどにスタートした日本ジュニア男子B(高校生以上20歳未満)は、スイムで遠藤樹(北海道連合)がトップに立つと、名取和正(神奈川県連合)、田村雅也(チームテイケイ練習生)、古川哲也(チームゴーヤー)、比嘉和真(チームゴーヤー)、林舟之輔(東京都連合)、岡野祐作(愛知県協会)、永田悠太(大阪府協会)、若杉摩耶文(日本体育大学)までが33秒以内でバイクへと移った。バイクでは若杉、岡野、古川、比嘉、田村、遠藤が第1集団を形成した。ランでは、遠藤が後退するなか、比嘉、古川の沖縄勢がリードを駆け、比嘉が初優勝を果たした。2位は古川、3位には若杉が入った。



全日本ジュニア9位入賞の永田悠太君

## ■大阪中学校陸上競技大会豊能地区予選

8/26(金)服部緑地陸上競技場で開催され、本校から6名が参加、小澤悠君(SIS9)が大府大会進出を果たしました。3000m 小澤悠 10'51"7位、春名暢(SIS9)、高橋直人(SIS8)、1500m 三木氣吹、寺田恵、800m 竹尾麻子(以上SIS7)

## ■第2回KIDSトライアスロン浜寺公園大会

8月28日(日)堺市の浜寺公園で開催され、ジュニアの部(Swim300m, Bike9km, Run3km)に3名が出場、厳しい残暑をものともせず全員が無事完走しました。<完走者>小澤悠(SIS9)、竹尾麻子、三木氣吹(以上SIS7) <ボランティアスタッフ>花光照宗、松原由佳、吉積彩(以上SIS10)

## ■吹田市長杯トライアスロン大会9名入賞

9月4日(日)に千里北公園で開催され、本学園から22名が参加、小学生 Swim125m, Run1.4km, 中学生 Swim500m, Bike10km, Run2.8km, 高校生以上 Swim1000m, Bike20km, Run5.6kmを全員が完走、うち9名が各部で入賞しました。応援に来ていただいた家族の皆様、ありがとうございました。<入賞者>中学女子2位竹尾麻子、3位柴田美奈(以上SIS7)、中学男子2位小澤悠(SIS9)、一般男子1位永田悠太(SIS11)、2位佐藤直仁(コーチ)、3位中島徳市(SIS10)、一般女子1位平井太佳子(教員)、3位松原由佳(SIS10)、壮年男子1位馬場博史(教員)。<他の完走者> James Trew, Jonathan Junqua(以上OIS6)、Kento Saito-Baba(OIS7)、早川いお、三木氣吹、阪上孟志(以上SIS7)、高橋直人(SIS8)、津高穂絵、春名暢(以上SIS9) 花光照宗、古岡祐輝、清水航(以上SIS10)、Raymond Terhune (OIS10)。



恒例の吹田市長杯トライアスロン大会

## ■ちびっこジュニアトライアスロン教室

10月30日(日)9:00-13:00に千里国際学園にて、JTU(日本トライアスロン連合)主催による、ちびっこジュニアトライアスロン教室が開催されます。小中学生対象で参加費無料。日本代表ナショナルチームの選手がゲスト講師として来校する予定です。千里国際学園トライアスロンクラブが後援します。参加申込はJTUのサイトから。先着90名になり次第締切りです。

## ■APIXC(Asia Pacific Invitational Cross Country)

11月11-12日にグアムで開催されます。この大会は今年で2回目。昨年は、APACの1校を含む11校が参加。激戦が繰り広げられました。今年本校からは初参戦ですが、上位入賞を狙って練習に励んでいます。昨年の参加校は次の通りです。

American School in Japan(東京)、Seoul Foreign School(ソウル)、Christian Academy in Japan(東京)、George Washington High School(グアム)、International Christian School of Uijongbu(ウジヨンブ・韓国)、Hong Kong International School(香港)、Simon Sanchez High School(グアム)、St. Mary's/Sacred Heart International School(東京)、Father Duenas/Academy of Our Lady(グアム)、Seoul International School(ソウル)、Harvest Christian Academy(グアム)。

# 旧バレーボールメンバーとコーチがカナダで再会

本多 真

第5期(1998)卒業生、龍谷大学大学院

「オヤジどうしてるかな、会いたいな」。

2005年3月下旬、私達は下呂温泉に浸かりながらそんな会話をしていた。

思えば同級生の中川雅子、定森智之、両氏によって企てられた2004年12月末の同窓会は同学年を中心に60名を超える参加者を集め、盛大に再会を楽しんだ。同窓生は、IT、リクルート、商社、医療施設、デザイナー、音楽家、研究職、報道機関など多方面に活躍の場を広げていた。再会はティーンエイジの頃の湧瀾とした気持ちを思い起こさせ、また再び会いたいと思わせるきっかけを与えた。

そして翌年春分の時節、同窓生と下呂に行った時、「オヤジ」との再会を望む声が上がった。「オヤジ」とは、OISの理科教師であり、男子バレーボール部の監督であったLarry Ethier先生のことである。インターナショナル・スクールでのキャリアを大阪から始め、台湾、ケニアを巡り、今秋からはアフリカ内のインターナショナル・スクールで校長の職に就いている。教育者としてのキャリアもさることながら、バレーボールの監督として当校男子バレーボール部を6度の関西リーグチャンピオン、3度のAPACチャンピオンに導いた手腕家でもある。「向かう所敵なし」のチームは、「オヤジ」の母国カナダへ遠征にも行った。

それにしても当時、なぜチームは強かったのだろう。平均身長は低く、バレーの素質がずば抜けているわけでもなく、練習量は他のチームとそう変わらな



高校時代、カナダ遠征時のチーム。背番号7、1、4、11、3は今回集まったメンバー。

かった(むしろ日本の高校に比すれば断然少なかった)。しかしインターナショナルのチームに敗北を喫することはなく、日本の高校とも互角以上にゲームを進めていた。今思えば、いつの間にか「オヤジ・マジック」にしてやられていたようにも思う。

下呂旅行を終えた一行は、忙しい時間の合間を縫って当時のバレー部メンバーを集めようと連絡先を探した。卒業して8年経つがメールアドレスを入手するのはそう難くはない。しかし当校の同窓生を集めるのは思ったより難しかった。それぞれの居住地は当然日本に限っておらず、結局7月中旬にカナダ・エドモントンに集合できるのは当時のバレー部12名中5名であった。それでも「オヤジ」に会うことが目的の旅行計画が変更されることはなく、7月16日、エドモントンのルーカス(「オヤジ」の息子、OIS卒業生、男子バレー部員)宅で再会を果たすことができた。何度も「unbelievable」と言いながら、目尻に沢山の皺を寄せる「オヤジ」は、年の功を重ね本物の「おやじ」になっていた。一方こちらは、相変わらず、適当な相槌とたどたどしい英語で受け答えをして久々の「オヤジ」との間の空気を楽しんだ。

それから三日間、一行は共に時間を過ごし、在りし日の思い出と将来についての話に明け暮れた。「この仕事が終われば、コロンビアで老後を過ごす予定だ」。いつもどおりの淡白な口調で将来を語る「オヤジ」は力強く、さまざまな困難を乗り越えてきた指導者の姿を窺わせた。一方で、私達が大人になったからこそ言える将来の不安についても話してくれた。「オヤジ」は、両親と同じ思いになることに不安を感じていた。

帰りの飛行機で今回の再会を思い返していた。「オヤジ」も私達も変わってないようで変わっていた。その変化は一瞬で齎されたのではなく、気付かないうちに齎されていた。「オヤジ」はバレー部の練習中、私達に特殊な技術や練習方法



再会したメンバー。前列男3名左から、定森智之、新倉慶、筆者。その後ろ左から、デヴォン・E、デボラ・E、メラニー・E、難波俊充。最後列左から、ルーカス・E、E先生、ニール・E。(EはEthierの略)

を要求しなかった。私達はただ毎日同じように練習をし、楽しく懸命だった。今回の再会で何と無く分かったのは、私達が一回の練習によって強くなったのではなく、しかしながら一回の練習を休めば強くなれなかったと思うということだった。そして今回の再会で私はひそかにその「オヤジ・マジック」の紐解きをしようと思っていた。でも一因一果の答えを期待していた私の問いそのものは愚問でしかなかった。「以升量石」の如く、「オヤジ」の心はもっと大きく測り知れなかった。

今回のカナダでの再会も、同窓会に多くの同窓生が参加するのも、有りっ丈の思い出を千里国際学園が育ててくれたお蔭と思い、母校に感謝している次第である。

## ★APACとは

Asia Pacific Activities Conference の略称で、次の学校が加盟しています。

< APAC参加校 >

北京インターナショナル・スクール (ISB: 中国)、上海アメリカン・スクール (SAS: 中国)、ブレント・インターナショナル・スクール・マニラ (Brent: フィリピン)、ソウル・フォーリン・スクール (SFS: 韓国)、カナディアン・アカデミー (CA: 神戸)、千里国際学園 (SIS/OIS: 大阪)

# 保護者会だより

●「保護者会だより」文責:保護者会Public Relations Committee

## 保護者会活動報告・予定

保護者会の活動を次の通り報告いたします。

### Board

・第2回定例会 5月26日(木)13:30~  
カフェテリア 学校から大迫校長先生のお話と各委員会からの活動報告。保護者会室備品、連絡方法について話し合っ  
てルールを作りました。定例会の報告・  
決定事項をホームページに載せることに  
しました。

・第3回定例会 6月23日(木)13:30~  
会議室 学校から大迫校長先生のお話  
と各委員会からの活動報告。保護者の活  
動で必要な時、どなたにでも使って頂け  
るようにcommitteeエプロンを作ることに  
しました。定例会のあり方について討議  
し、議案を決定する際の注意事項を確認  
しました。

・6月6日 折鶴講習会(SIS/OIS合同)  
・6月22日 スクラップブック講習  
会(SIS/OIS合同)

・7月2日 大阪府私立連合会総会出席  
・7月5日 大迫校長先生と栗原先生と  
の茶話会

今後の定例会の予定 9月8日、10月  
6日、11月10日、12月1日、1月12日、  
2月2日、3月2日 いずれも木曜日、  
3F会議室で13:30から行います。定例会  
は保護者の方ならどなたでも参加でき  
る場です。皆様のご参加をお待ちしてい  
ます。

### International Fair Committee

インターナショナルフェア委員会を開  
催しました。5月9日、19日、6月7  
日、22日、7月5日、8月24日、9月9  
日、27日 10:00~12:00 会議室にて

### Hospitality Committee

6月10日(金)カフェテリアにてスポー  
ツパンケット(130人)でサブマリンサン  
ドと飲み物のサービス、6月14日(火)春  
季コンサートにてお菓子と飲み物のサー  
ビスをボランティアの方々とお手伝い。

10月14日(金)と15日(土)男子バレーボー  
ル試合でのコーチへのランチサービス。

### Network Committee

4月 ネットワーク委員会ミーティン

グ。新/編入生の地域チェックと割り振  
り。地域別名簿の作成

5月 ネットワーク委員会ミーティン  
グ。地域リーダー会のお知らせ印刷・発  
送。地域リーダー会開催

6月 地域別名簿の印刷・発送。地域親  
睦会開催後の様子ホームページ掲載原稿  
依頼

=秋学期活動予定=

編入生・転出生・転居生に伴う地域別名  
簿のチェック。地域名簿の変更・追加を  
行い、印刷・配布(該当地域リーダーの  
み) 地域親睦会の開催状況を調べる。

### Public Relations Committee

5月 インターカルチャ5月号発  
行・6月号編集・校正。ホームページ運  
営。「ホームページ ユーザー名・パス  
ワードのお知らせ」を保護者宛に発送。

6月 インターカルチャ6月号発  
行・特集記事編集作業。ホームページ運  
営。メールマガジン配信開始。

7~9月 インターカルチャ10月号  
編集・校正・特集記事編集作業。ホーム  
ページ運営。メールマガジン配信

### 学年懇親会の報告

11年生学年懇親会:6月1日11:30~  
13:30 3F会議室

12年生学年懇親会:6月4日12:00~  
14:00 梅田サントアンブローズ

9年生学年懇親会:6月9日13:00~  
15:00 3F会議室

10年生学年懇親会:6月16日13:30~ 3  
F会議室

8年生学年懇親会:9月16日13:00~  
15:00 3F会議室

7年生学年懇親会:9月20日10:00~  
12:00 3F会議室

### International Fair Committee

2005 SIS/OIS インターナショナル  
フェア開催まであと1ヶ月!

2005年11月19日(土)開催

2005 SIS/OIS インターナショナルフェア  
開催まであと1ヶ月!

いよいよ、インターナショナルフェア  
(IF)まで残すところ後1ヶ月。IF委員会  
から各プロジェクトチームに分かれた分

科会活動が活発に行われています。学園  
創立15周年を記念して、SIS、OIS両校で  
楽しいフェアに盛り上げましょう。皆様  
ご多忙の折ですが、引き続き、ぜひとも  
ご協力をお願いいたします。

10/8 ログマーク、キャッチフレー  
ズ、イラスト 公開投票〆切

10/10 エンターテイメント募集〆切

10/10 ブース募集〆切

10月中旬 オリジナルパーカー 予約  
販売実施。

11月中旬 オリジナルパーカー フェ  
アに先駆けてお渡し!(当日販売あり)

11/19 インターナショナルフェア 開催  
【各プロジェクトチームからのお知らせ  
&お願い】

#### 《エンターテイメントチーム》

エンターテイメント出演者募集 SIS OIS  
の保護者で一芸をお持ちの方、エンター  
ティナーとして舞台に出演してみませ  
んか?出演していただいた方には、当日  
フェアのお食事券を差し上げます。(但  
し、保護者以外とさせていただきますので悪  
しからずご了承下さい。)お手伝いSTAFF  
募集

#### 《ブースチーム》

インターナショナルフェアにお店を出  
してみませんか?学年、クラス、お友達同  
士で・・・どんなグループでも結構で  
す。また、お店を出すほどではないけど、  
何かお手伝いしてみたい!などなど、  
委員までご連絡下さい。

#### 《クリーンUP・エコチーム》

一緒にエコロジーを考えましょう!イン  
ターナショナルフェアを楽しく快適に過  
ごすためにゴミ対策問題を企画し、当日  
のゴミ回収等のお手伝いをして下さる方  
を大募集!!短時間でもOK。

#### 《IF本部より》

PRチーム大募集! 保護者へフェアの  
宣伝広報のお手伝いをして下さい。

寄贈品募集! ご自宅に眠っている不用  
品(新品)を寄贈下さい。

手作りクラフト品募集!! 今年度のIF  
委員会ではクラフト製作していません。  
手作りクラフトのお好きな方、出品して  
もいいお品を持っている方、本部ブース  
にて販売します。クラフト用の材料もあ  
りますので、お尋ね下さい。

フェアに関するご質問、お問合せは、In  
ternational Fair Committeeのアドレス  
まで

## IF委員本部より ～フェア当日の交通手段についてお願い～

今年のインターナショナルフェア当日は、昨年度実施致しました臨時バスの運行を行いません。フェアの予算の中でバス運行の経費がかなり嵩むにもかかわらず、昨年の利用実績が非常に少なかったのがその理由です。学園の最大行事の一つであるフェアを、安全にスムーズに、かつ地域住民の方々へのご迷惑を最小限にするために、フェア参加の皆様は公の交通機関等を利用して頂き、マイカーのご来校を避けて頂きますよう、何卒ご理解頂きたく存じます。インターナショナルフェアは学園の保護者が学園のため、子供達のために楽しく企画運営するお祭りです。皆様の暖かいご理解とご協力をお願い申し上げます。

## シリーズ「学校を取り巻く人たち」

第1回＜開校15年目を迎えて思うこと;先生方からのメッセージ＞

Public Relations Committeeでは、開校15年目にちなんで、「学校(SIS)を取り巻く人たち」(4回シリーズ)というテーマで特集記事を組むことにしました。第1回は、大迫先生をはじめとする学園の先生方からのメッセージをお伝えします。

## 大迫先生からのメッセージ

大迫弘和  
S I S 校長

この文章を書くにあたっての「事前のインタビュー」のために夏休み前にPR委員会の皆様が校長室を訪ねてくださいました。そのときお話しさせていただきましたことを再現するようなスタイルで書いてみます。但しその時までお話しできなかったことや、それ以降に私が考えを進めたことも含みます。

**質問；S I Sの教育の基になっているものは何ですか？例えばどこかの国の教育を参考にしているとか、どこかの教育学者の考えを参考にしているとか。**

大迫；1991年のS I S(そしてO I S)の開校を目指し準備が進められていく過程で、日本で初めての形態を持つこの学校の教育を一体どんな内容にしていこうか、関係者でたくさん話し合いが行われました。関係者とは学校の立ち上げに参画した教職員ということです。私も当時はイギリスに住んでいましたが、この議論にイギリスから参加させていただきました。

それはS I Sをそれまでの日本には存在していないすばらしい理想の学校にしようという熱い議論でした。世界のような国の教育について、その長所と短所を十分に認識している非常に優秀な方々が、正に国際学校の名に相応しく、世界各地から結集し、議論が行

われました。

ご質問に答えるなら、S I Sの教育は「どこかの国の教育」をモデルにしているわけではなく、また、特定の教育論に基づいているわけでもありません。S I Sの教育は、S I Sに集う多様な背景をもった生徒一人一人にとって最も有効と思われる教育を、あくまでもS I S独自のものとして、世界から集まった教員のそれまでの経験と知識とそして夢を結集して作り上げたものです。(そして、逆に、今やS I Sの教育が、日本の中等教育のひとつのモデルになっている、ということも申し上げてもよいと思います。)

私は、教育のヒントは生徒の中にある、と考えています。生徒を見ていると、今、彼らに必要なことはどんなことなのかははっきりと見えてきて、そこから教育のアイデアが次々と生まれてきます。S I Sでは、今、目の前に存在する生徒のために、なにか新しい教育が必要である、もっとこうしてあげたほうがいい、と考えたとき、それを躊躇せず取り入れていく、といった柔軟性を、開校時から一貫して失わずに持っています。いつまでも、そのような自由さ、柔軟性を失わずに進んでいければと願っています。

**質問；詰め込み教育でなく、知識を探究し獲得していくという学園の教育方針はすばらしいと思いますが、実際に目の前にある大学**

**受験について、学園はどのような対策を立てておられるのか、また、大学受験に対して、どのような考え方をもっておられるのかお聞かせください。**

大迫；S I Sは中等教育機関ですから子どもたちをしっかりと次につなげていってあげる責任がある、ということを私は繰り返し申し上げてきていますし、実際、S I Sはこれまでその責任を十分に果たしてきていると思っています。

S I Sのように、教育の理想を追求する中等教育機関が大学の入試制度に理想の追求を阻まれる、といったことがこれまで日本の教育の世界では繰り返されてきました。「大学入試制度が変わらない以上、中等教育は変わらない」という言い方がよくされるのはそのためです。

しかし、その事情が少しずつ変わってきているように思えます。例えば、今回、関西学院大学がS I Sと協定校の関係を結び、S I Sの生徒の推薦入学をかなりの幅で認めてくださることになりましたが、このことで一番意味が大きかったのは、大学側が「S I Sの教育内容」を評価していただき、そのような教育を受けた生徒なら是非きていただきたい、という考え方を示してくださったことです。

質のよい中等教育を大学側が評価する時代に入りつつあります。S I Sはこれまで通りに、中高時代にこれだけ

は必要だと考えるトレーニングを続けていくだけです。

S I S が校則もなく制服もないということで、甘い学校である、と誤解を受けた時もあったように（それは決してそうではなく、実は非常に厳しい学校である、ということをもう世間の多くの方は知っていますが）、S I S が獲得型参加型の授業を展開し、プレゼンテーション力の育成に力を入れていることで、大学のことを考えていない学校、という風な捉え方をされているケースもあるのでしょうか。しかし、S I S ほど、大学のこと、大学での彼らの生活のことを真剣に考えている中等教育機関はないのではないかと、私は考えています。大学でしっかり学ぶ学生になってもらうために必要なトレーニングをどんどん行っているのですから。実際、多くのS I S 卒業生が、大学入学後も目標を持ちしっかり勉強していることをよく耳にし、S I S の教育の正しさに自信を深めるのです。

S I S にお子さんを送ってくださっているご家庭も、学ぶこと、の意味を、ただ大学に合格すればいい、というところを超えたところに求めているらっしゃると考えています。

保護者の皆様がお子様をS I S に預けようと思われたときのお気持ちをいつまでも揺らさずにいてくださればと願っています。

その日の「インタビュー」ではもっといろいろなこととお話しさせていただいたのですが、もうずいぶんの字数になってしまいましたので、今回はここまでとさせていただきます、また機会がありましたら、ということにさせていただきます。

### 開校15周年を迎えて

高橋寿弥  
数学科

私は開校から本校で勤務しています。この15年間を全て振り返ると紙面では書ききれないくらい色々な思い出がありますので、今回は開校1年目の様子を紹介したいと思います。

開校元年（1991年4月）は、中学1年2

クラス、中学2年2クラス、中学3年1クラス、高校1年2クラスで、各々15人程度のHRからなる、今よりも小規模な生徒集団で学校が始まりました。将来全ての学年が揃ったときのことを考えて教室が作られていたので、空き教室がたくさんあり、生徒は建物の各スペースを贅沢に、実に伸び伸びと利用していたのを覚えています。我々教員の本校に赴任するまでの経歴も様々であり、帰国生徒を教えた経験のある教員は殆どいない状態で、生徒に向かい合うに当たっては、試行錯誤の毎日でした。当時、本校では英語・国語・数学では、「習熟度別クラス編成」で授業が展開されており、各学期の成績によって、次学期の初めに「ハイレベルクラス・スタンダードクラス・ベーシッククラス」に生徒が振り分けられ、クラスが再編成される、という形で授業が展開されていました。生徒はその所属クラスによって一喜一憂するのですが、そのシステムは良い意味では「上のレベルのクラスに上げられるように頑張ろう」という励みになることですが、「ある種のヒエラルキーを生み出す結果になり、それが授業以外でも影響を及ぼす」ということで、特に「日本のカリキュラム」に対応した授業を受けた経験の無い生徒にとっては、その心境は複雑なものであったと思います。

開校から15年間で、私が生徒に常に伝えてきたメッセージを最後に掲げます。

「多文化理解を深める」「真の国際人になる」手段は、「英語の力を伸ばすこと」だけではありません。コミュニケーションの手段として使う言語はこの国の言語でも必要になれば勉強すればいいと思うし、極端に言えば、日本語だけでもコミュニケーションは可能なのです。またコミュニケーションの手段も言語だけではないと思います。生徒たちが本校で「真の国際人」になるための色々な術（すべ）を「15年の歴史」を超えて、見つけ、学んでいってくださるならいい、と常に願っています。

### 宇宙旅行15年目に思うこと

野島 大輔  
社会科

創立15年が経った千里国際学園とかがけて。

短い準備と急ごしらえの滑走路からなんとか地面を離れ、諸般のエンジン・トラブルを乗り越えてようやく巡回軌道に乗りつつあるかな、と思って窓から地上を見たら、世界はまったく変わってしまっていた時の、スペースシャトルと解く。

そのココロは...?

#### 1. 「新国際学校」の窓から

地域の公立の小学校で、外国籍やダブルの子供たちをチームでケア&サポートしていく実践を始めている学校があります。国際理解教育は、どんなに田舎の学校でも、今やまったくやらない学校は非常に珍しいでしょう（いや、田舎こそ国際理解教育の宝庫らしいです）。従来「閉鎖的」といわれていた国内のインターナショナル・スクールや民族学校と、地元の学校とのさまざまな交流が、いま盛んに進められています。左右から、新国際学校の周囲を、いろいろな学校が、それぞれの姿とスタイルで、いま飛び越して行きます。

#### 2. 語学学習の窓から

ご承知のとおり、英語のイマージョン教育をしている学校は、今やあちこちにあります。いやいや、いわゆる「第二」外国語を必修やそれに近い形で学ばせている学校も。身近なアジアの言語を学べる授業を置いている学校もあります。いくつかの海外日本人学校でも、現地の言葉や文化を体系的に学ぶプログラムが、次々とできていくと聞きました（そもそも世界の大半の人間は、バイリンガル・トライリンガル・それ以上なのですね）。

#### 3. 「自由」主義の窓から

本人の自由と責任を学校生活の基本とする学校は、古くからいくつもあります。ガチガチ校則主義といわれた学校も、近年次々と校則の見直しを進めてきています。厳しい生活指導の必要な場面に人権的な配慮が行き届きすぎ

て困っている、という学校の悩み節も聞かれます。

SISの9年生の社会科で、毎年「自由」についての論文の作成練習をしてもらっていますが、開校当初には大多数を占めていた「校則大嫌い、自由大好き」型の意見よりも、「日本の学校や社会は自由すぎるので、少々引き締めたほうがよい」と結論づける作品の割合が増えてきています。あるアンケート調査によると、親や教師への反抗、ドラッグの使用、学校のずる休み、売春、などについて「本人の『自由』でよい」と回答した日本の生徒の割合は、「自由」大国・米国の数倍になるそうです。

#### 4. 「経験」学習の窓から

訪問、実験、討論や論文など、生徒の経験活動を重んじる教育を進めている学校は古くからあります。「総合学習」の導入にはいまだに賛否さまざまな議論（余談ながらそれらの議論の中には本題を外れたものがたくさんあるように思えます）がありますが、全国レベルの教育研究会に行くと、必ずしも総合学習の実施に恵まれていない厳しい環境で、すばらしい実践をしておられる先生方がたくさん居られます。

また例えば、SISの9年生たち全員に毎学期インタビューをしています。地元の公立の小学校でディベートやプレゼンテーションをまったく経験しなかった生徒は、今やきわめて少数になってきています。机上で座学の授業をする方がむしろ苦手、という世代がもう生まれてきています。

短い紙幅ですので、上のような単純な書き方には反発を覚える方もたくさん居られるかもしれません。もちろん、私もスペースシャトル・センリ号の古株乗組員の端くれとして、「そうはいってもうちの教育は、よそとは一味ちがうわい!」「4つ同時に揃えているのは、他にはないだろう!」とクダを巻きたくなる、本能と自負も有しています。

だがしかし。「新国際学校」は、もう“旬”を過ぎてしまったのでは...?

私たちは理想を目指して甲論乙駁×悪戦苦闘の中、映えある歴史を刻んで

きたつもりで居ても、ついついそんな焦燥感も沸いてきてしまいます。

「だって、ご覧なさい。『新国際学校』は、千里国際と都立国際の後には、長い間もうどこにも創られていないでしょう。」

実際そうおっしゃる専門家の方もあります。そこまで聞くと、15年前に大喜びで離れたはずの蒼い地球のシルエットが、ますます大きくなって、宇宙船の窓から臉に迫り映ってくるようです。着陸点検なしにこのまま飛び続けても大丈夫でしょうか。そういえば、前回打ち上げのスペースシャトルは、小さな表面材が一つほつれただけで、空中分解という大惨事を引き起こしてしまいました。

では、「オンリー・ワン」を目指したような、「オンリー・ワン」に追い込まれてしまったような(笑)、我が愛すべき学園のスクール・アイデンティティの「ネクスト・ワン」は、この後どこに求めていけばいいのでしょうか...?!

荷の重すぎる問いを、自ら発しておきながら、無責任にもその重さに、いや宇宙空間での無重力感に、思わず卒倒してしまいそうになりました。

15年前、OIS/OIAの合同職員会議がわれらがセンリ号のメイン・エンジンでした。所属・国籍・教科に関係なく、学園の教員全員が、共通の課題に参加型で取り組みながら、何度も合宿をして学園創りやプログラム創りに取り組みました。僕は合宿先で、OIS初代教頭氏と湯船に浸かりながら、それまで誰ともしたことの無かったような“熱い”教育談義を、互いにのぼせ尽きるまで、しました。

入学式のテーマソングは“ We Are the World ”。初のピクニックは全校生徒91名による、万博公園でのハンカチ落とし。ミュージカル。ジャパン・ウィーク。ユニークな授業や行事。失敗や事件も数知れずありましたが、単に懐かしさだけで今思い返しているのではなく、理念に挑戦する現実が、私たちの第一歩には確かにあったように思えるのです。(そしてもちろん、宇宙船の打ち上げのためには、何千人というスタッフの人々の血と汗と涙がありま

す。)

スペースシャトルの乗組員は、地球を周回した後、どんな顔をして地上に降りてくるものなのでしょう。あたかも地上にずっと居たかのような顔をされるのでしょうか。宇宙を旅した経歴を“誇り”を持ってひけらかすのでしょうか。周囲の目に構わず、いつまでも宇宙服を着たままで日常生活をするのでしょうか。宇宙でのたくさんの実験の成果は、この後どう生かされるのでしょうか。

宇宙旅行の経験者が「いや、地球だって大きく見えるけれど、いわば『宇宙船・地球号』なんだよ」と強気に言えば、いったいどれくらいの人々が共感してくれるのでしょうか。それとも私たちは、宇宙酔いのままで、むしろ永遠に地上には帰って来ないのがよいのでしょうか。

スペースシャトルの先駆的な存在であったアポロ計画について。「実は、アポロは月に行っていなかった」説が、近年にわかにセンセーションを巻き起こしています。

僕は、われらがセンリ号は、実はまだ宇宙に行っていなかったような気もしてなりません。...でも、もしそうだとすると、先ほど4つの窓から見えた景色は何だったのでしょうか。15年も乗り組んでいた自分の眼からは、感覚が麻痺してしまっていて、何が現実で何が本当だったか、もう客観的には解りません。15年目の初夢は、果たして吉夢か、悪夢か。どなたか自信のある方に占ってもらおう、などという甘えすら不謹慎にも心中に芽生えつつあります。

“PERT”というプロジェクト運営のメソッドは、「アポロ計画の達成を2年縮めた」と言われます。

数々の美しい思い出と共にですが、学校システムについて、意思決定メカニズムやコンフリクト・リゾリューションについて、国際ビジネスの常識や国際機関の運営ノウハウが、教職員の組織の相互関係や大きな意味での学園運営にほとんど取り入れられて来なかったことが、ポンコツ乗組員の私には返す返すも悔やまれる、“2005年宇宙の旅”です。

### **Individually Creating a Collective Excellence**

Greggory Navitsky  
Art

We are collectively part of an immense spiritual and physical energy that continually moves along the division of the past and the future. All our decisions and actions are simultaneously and jointly altering the present moment and creating a new direction for the future. While nothing remains untouched or unchanged it also seems that nothing is completely lost forever either. Each person is truly unique with their own strengths, talents and experiences, but fundamentally I believe we each share a common thread.

Young people have rewarding challenges that they must overcome to find out who they are as well as their inherent strengths and talents. The greater their quest to discover themselves the richer their experiences will be. Here at OIS and SIS our students have a caring and supportive environment in which to confront some of these challenges. I feel by having such positive cultural, spiritual and ideological diversity, we are helping our students gain a positive image of the global community and this can help foster a healthier and more compassionate identity of self and others.

With great thanks to the Senri International Foundation and its founders we have witnessed a noble educational vision take root, and together the students, parents, teachers, administrators and the greater community have made it flourish. Here at OIS and SIS, wanting to create a model school for Japan and the world, the Senri International Foundation created our schools with the concept of "togetherness". Our students have witnessed firsthand the cohesiveness and the benefits of

people with different traditions, languages, customs and beliefs working together for the collective success and happiness of our students. Now that the schools are 15 years old and hundreds of students have successfully passed through our system, we see how these students have utilized these ideas and experiences. Our students will all eventually continue their education or work throughout Japan and the world. As they are faced with new challenges and situations, they will often look back at their years spent at OIS and SIS to help guide their decision making.

Opening our doors as an educational institute comes with a great responsibility. We each are individually responsible for creating a collective excellence. We live in a world soaked in poverty, war, oppression, discrimination, greed and ignorance. I feel that if we are to truly be a model school for Japan and the world we must continue to build upon our founding vision and continue to move forward. To help counteract the ills of our time we must further and more openly embrace equality, caring, communal cohesiveness, compassion, charity, and zero tolerance of violence. Through these endeavors our students will still achieve academic excellence while further broadening their sense and understanding of "togetherness".

I feel people's true greatness lies in their ability to reflect and to speculate. This allows us to continually maintain the present state and prepare for the future. The ethical decisions and actions that we implement will be what our students will take and build upon tomorrow. A better future is obtainable, but we must first make a better today.

**- 集団の優秀さを個々に創ること -**  
日本語訳

グレゴリー ナヴィツキー  
美術科

我々は、一時的に、絶えず過去と将来の境界線に沿って進む巨大な精神的かつ肉体的なエネルギーの部分の集合です。我々の全ての決定と行動は、同時に、そして集団で現在を変えています。将来のために新しい方向を作っています。何事もそのままであるか、不変のままではない一方で、何も永遠に完全に失われてもいないようです。各人は、各々の強み、才能と経験という観点から個性的であります、しかし、基本的に私は、われわれは各々が共通の糸を分かち合っていると思っています。

若者たちは、彼らが彼らの固有の強さと才能、および自分が何者であるかについて知るために、克服しなければならない価値ある挑戦をします。彼ら自身を発見する探索が大きなものであればあるほど、彼らの経験は豊かなものになるでしょう。ここOISとSISでは、学生たちにはこれらの挑戦に直面するにあたり、親切で支えとなる環境があります。私はそのようなポジティブで、文化的で、精神的で、観念的な多様性を持つことによって、我々は、学生達が世界的なコミュニティの前向きなイメージを得ることを手助けし、そして、これは自身その他の、より健康的で、より思いやりがあるアイデンティティを育むのを助けることができると思っています。

千里財団とその創設者の方々のお陰で、我々は優れた教育的なビジョンが根付き、そして、学生、両親、先生、管理者とより大きなコミュニティがそれを全盛にさせるのを目にしました。ここOISとSISで、日本と世界のためにモデル校を創りたくて、千里財団は団結の概念で、我々の学校を創りました。学生達は、我々の学生の総体的な成功と幸せのために、異なる伝統、言語、習慣と信条を持ちながら共に働く人々のまとまりと恩恵を目にしました。学校ができて15年が経ち、そして、何百人もの学生が我々のシステムの中を成功裏に通り過ぎ、我々はこれらの学生がどのようにこれらの考え

と経験を利用したかが分かります。学生達は皆、結局は彼らの教育や仕事を日本や世界中で続けます。彼らが新しい挑戦と状況に直面して、彼らは彼らの意思決定を導くのを助けるためにOISとSISで費やされた彼らの数年をしばしば振り返るでしょう。

学校法人として門戸を開くことは、大きな責任を伴います。我々は、個々に集団の優秀さを築く責務を負っています。我々は、貧困、戦争、抑圧、差別、貪欲、および無知で浸された世界に住んでいます。私は、我々が本当に日本と世界のためのモデル校になるうとしているならば、我々は創立のビジョンに基づいて前進し続けなければならないと感じます。我々の時代の不健康さに対抗するのを助けるために、我々は平等、いたわり、コミュニティのまとめ、同情、慈善、と暴力の排除を、さらに、そして、より公然と受け入れなければなりません。これらの努力を通じて、我々の学生達はさらに彼らの感覚と一体感の理解を拡げているアカデミックな優秀さをやはり達成するでしょう。

私は、人々の本当の偉大さは、彼らが熟考して推測する能力の中にあるということを感じます。これは、我々が絶えず現在の状態を維持して、将来に備えることを可能にします。我々が実行する倫理的決定と行動は、我々の学生達が責任をもって、明日に築き上げていくものです。より良い将来は入手可能ですが、我々はまず、より良い今日を作らねばならないのです。

### Sports Day

平井太佳子  
体育科

15年前、Sports Day は4歳のOISの幼稚園の生徒から小、中、高校生はもちろん保護者、教員まで参加し、まさに、世界人権宣言の精神に則り、人種、皮膚の色、性、言語、宗教、年齢、その他に関わらず等しく楽しむイベントとしてスタートしました。中学生が幼稚園の子供と二人三脚をする姿は微笑ましいものでした。

幼きものをいたわり、競争性を排除し、皆が楽しめる雰囲気を保ち続けることは、一方で思い切り駆け抜けたい、競い合いたいと思う成長期の青少年たちに我慢を強いるものでもありました。そして模索が始まりました。

「みんなが参加し、みんなが楽しめる」精神を保ちつつ、「退屈せず、燃える」Sports Day を作り上げていったのは生徒会を中心とした生徒達自身でした。幼小の部と中高の部が時間的に分かれた後も、中高生がボランティアで幼小の部に運営スタッフとして参加し続けています。中高生の部のオープニングスピーチは5年生の生徒の役割です。昼食時にグラウンドに人が残ると午後の競技の道具の設置ができない、という理由でパフォーマンスが昼休みに行われるようになったのはいつからだったのでしょうか。今ではなくてはならないイベントです。色々な問題を発想の転換、工夫、時に妥協で乗り越え、諦めることなく進化し続けてきたのが Sports Day です。今年はチームの分け方についての問題提起が行われました。

15年前、ここには何もありませんでした。今、知恵と工夫のこらされた、世界に二つとないイベントが行われています。

### バイリンガルな学校図書館から

<「銃規制」についての日本語の本はありませんか? >

青山比呂乃  
司書教諭

千里国際学園は創立15年目に入った。その中で、図書館は、玄関に入つてすぐの場所に位置し、OIS/SISの幼小中高の生徒・教職員はもちろん、幼稚園や小学校児童の送り迎えの父母(生徒以上に日本語や英語がまったく話せない人もいらっしゃる)までが集う場、必然的に日英バイリンガルの図書館として、学園全体と同様ユニークな道を歩んできた。

日英の図書の分類は、NDC(日本語)とDDC(英語)の二本立てで、コンピュータ目録も図書の置き場所も日英を別々にしている。1本化も考えないではなかったが、どちらかの言語しか出来ない利用者があるため、操作画面を2本立てにする必要があり、件名(内容が何かというキーワード)も、すべてバイリンガルにすることには無理があるため、別々にしているのだ。結果的には、これが一番効率的で、使いやすいだろうと思っている。

しかしバイリンガルとは、図書や雑誌だけの問題ではない。両方の言語の資料を同じずつの規模で同じような内容で集め、英語資料と日本語資料のそれぞれに責任を持つ司書教諭を1名ずつ置き、さらに現在は4名のパート司書(5時間勤務)が日英ともに対応しているのだが、実際に運用してみると、バイリンガル図書館とはそんなに簡単なものではないのだ。

ディベートやディスカッション、レポートとその発表、という形態の授業が、この学園ではとても多い。特に、外国人教員の英語の授業の中には、その名もSpeech & debateというものもあるし、模擬国連のクラスのような、各国の利害を様々な観点から調べ上げた上での高度なディスカッションを要求する授業もある。日本人教員の授業でも、例えば、高1の比較文化では、生徒各自がテーマを何か一つ選び、半年間かけて調べまとめて1コマの授業を丸々使って発表をする。

そんな中での質問が、例えば、「銃規制」についての日本語の本はありません

## MIMIコーナー

### 保護者会だより「MIMIコーナー」のご案内

保護者の投稿欄です。し、エッセイ、イラスト、提言、苦言、質問何でも結構です。皆さんからの声を大募集します。誌上匿名希望でも、投稿の際は記名して下さい。受付場所：玄関脇の赤いポスト或いはpr@sispa.jpへお願いします。担当：Public Relations Committee

か?という質問。これは1992年のハロウィーンに留学生が殺された事件から、アメリカの銃規制について話題になった頃のディベートのテーマなのだが、その時に気が付いたことがある。アメリカから購入している図書館にある英語資料の中には、10代の生徒向けの「銃規制」「薬物中毒」「人口妊娠中絶」などの本が適当数、ちゃんと存在しているということなのだ。アメリカの高校で授業でも取り上げてディスカッションしたりしているテーマから、日本の高校との違いをひしひしと感じさせられた。

その後、約10数年を経て、最近ようやく日本語でも薬物中毒の本などがだいたい出版されてきている(さすがに銃規制の本はあまりない)が、それは、それだけそういう問題が日本でも身近になってしまった、という社会事情を反映しているとも言えて、なかなか複雑な思いがする。

バイリンガルに育ってきている生徒たちとしては、英語にある資料なら、日本語でもあるだろうと、気軽に聞いてくる。ところがそう簡単にはいかない。また、ある主張に賛成意見の資料があるなら、反対意見の資料も当然あると思って探しまくるが、事柄はそんなに単純ではない。世の中の趨勢がどちらの意見に傾いているかで、ある主張が常識と考えられるようになり、そういう本や雑誌ばかりが出版されるということがある。

同じように日英の資料をそろえ、同じように対処しようと思っても、各々にその出版事情があり、あって当然と思う出版物が、片方では出ていない、とか、社会通念上、中高生向きにはあまり取り上げられていない(採算ベースに乗らない?)ということがあるのだ。こうした、社会時事問題系のティーンエイジャー向け図書は英語の方が充実しているが、逆に英語資料ではほとんど見かけないジャンルやテーマもあるに違いない。

OISの小学校の先生たちは、小学生~中学生位を対象とした各教科の内容を取り上げた本をたくさん図書館から借りていき、教室で生徒たちに使わせて、調べて発表、まとめてポスターにする、調べた人物になりきって説明させ

るなどを行いながら授業を進めていくことが多い。図書館での資料探し自体も、小学3年ぐらいから始めて、OIS高校生になれば、使う資料は大人向きの図書、雑誌、NewsBankなどの雑誌記事データベースになっていき、発表やまとめ方の形態も高度になり、発表法も大人のプレゼンテーションとなっていくが、調べたり発表したりという方法論は基本的に同じだ。

日本の学校ではやはり、非常に手際よくまとめられたエッセンス集のような教科書を使い、資料集、問題集、参考書など、これもよくまとめられたものを使って進めるのが、多分一般的な授業形態だろう。それとはかなり違う、OISのこうした授業形態のカリキュラムの中に、図書館はしっかりと組み込まれて機能している。

こうした英語サイドでの授業展開を図書館で見聞きしているうちに、日本語での様々な授業での調査研究の指導のしかたも考えさせられることになった。現在は、SISでも上記「比較文化」などの授業の資料検索のオリエンテーションで、検索のコツを説明したりしている。さらに、司書教諭である私自身が、資料探しから始まるレポートの書き方、発表のし方などを教える中3以上向けの総合科目「情報の技術」を担当している。学期完結制の始まった2000年度から始めたものだが、同時に、いくつかの教科教員とのチームでこうしたリサーチ・スキルを教える、中学1年の必修総合科目「知の探検隊」も始まって、SIS独自のプログラムとなっている。

こんな指導がうまく軌道に乗ると、生徒たちの図書館における動きが格段によくなって、自分でどんどんいろいろな調査研究を始める人もいる。わからない時にスタッフに聞いてくる質問も、人によっては一筋縄ではいかない高度なものになってきているのだ。

#### 斉藤数先生(理科、あけぼの寮ハウスマスター)を訪ねて

**Q. まず、寮のハウスマスターになって、良かったと思われることは何ですか?**

**A.** 学校生活以上に子供たちのさまざまな面を見ることができるところです。

寮の事務室にいと、生徒が相談に来たり、勉強の分からないところを聞きに来ます。担当科目以外でもわかるところは教えています。

**Q. 生徒たちへの要望はありますか?**

**A.** きちっとした言葉づかいと、朝8時までには登校するということです。それと、寮に限らず他の生徒にもやることですが、勉強時間が1時間くらい多いのですが、私の場合は2~3時間でも足りませんでした。

**Q. 1日2~3時間ですか?**

**A.** はい。勉強は、すればするほど時間の足りないことがわかるでしょう。

**Q. 写真クラブの顧問をされているのですか?**

**A.** 10年くらい前から母親写真部を作っています。撮影会の後、コンピュータを使って絵画風にしたり、合成処理をしたりする方法を教えてください。「写真を撮る」ということは、風景をとっているようで、実は「自分」をとっているのではないのでしょうか。

**Q. 写真暦は長いのですか?**

**A.** はい。フィルムカメラ・デジタルカメラと、もう300台以上は買いました。いつも良いものを求めて、あれこれ使うのですが、満足できるカメラには、まだ出会っていません。

**Q. 好きなことを、とことん追求されるのですか?**

**A.** 若い頃は、いくら欲しくても何も買えない時代でした。それが、少しずつ手に入るようになって、欲しい物へのイメージや夢をもっていたこともあり、実物を手に入れてみると、いろいろな点で満足できないのです。今の子は、新しいものが次々出るので、追いついていくのに、精一杯で、ゼロから考える機会がありませんし、物への自分なりの夢を持つことができにくい時代になってきているのではないのでしょうか。違った生活や例外的なのを見ていないので、思いもよらない発想がしにくくなっているのだと思います。

**Q. そういえば、個性的なようでどこか画一的です。**

**A.** この学校の授業は、物事をゼロから考えてみたり学んだりすることが多いと思います。

**Q. 立ち入ったことですが、そん**

なにカメラを買って奥様からクレームは出ませんか？(笑)

A.まったくでません。幸いなことにカメラには興味がないので、新しいものを買ってもわからないのです。また、古いものを処分してから新しく買うので、ためこみませんし、中古カメラの場合は、買ったときより高く売れることも多いのです。

Q.ところで、先程の勉強時間についてですが・・・

A.中学、高校時代に勉強を通して身に付けた事というのは一生忘れません。大人になってからでは、もう頭に入りません。無意味と思われる勉強も、その科目で習った考え方などがほかのことに応用できます。だからこそ若いうちに、沢山勉強すると良いと思います。また、この学校には、いろいろな特技や趣味の豊かな先生が沢山おられます。自分が何かに興味をもったら、必ずその方面に詳しい先生がいますから、その先生を見つけて、いろいろと個人的なつながりを持ってたらずばらしいです。

Q.勉強や趣味のことで、親は子供に口うるさく言ってしまうのですが・・・

A.親が子供にしてあげられることは、「教育と自信をつける」事だと思います。子供が何かに自信を持てるよ

うに育てられれば、ベストではないでしょうか。たまには子供と出かけて、海を見ながらおいしいものでも食べて語り合えればどんなにか楽しいでしょう。

**なんだか元気が出てきました。本日はありがとうございました。**

**千里国際学園の語り部**

福島浩介  
国語科

博士課程前期を修了し、この学校に職を得て、あっという間に15年目です。もともと郷里の岡山県の公立高校で吹奏楽部の顧問になりたくて教育学部へ進学した私なのですが、1990年の夏、県教委と千里国際学園から合格を頂き、やや考えた挙句、大阪へやってきました。大学院の在学中に、広島県立安古市高等学校(アナウンサーの魚住りえさんや、女優の戸田菜穂さんが在学中でした)で非常勤をしていましたが、専任の教諭としては初めての職場でした。採用が決まった時点では、校舎がまだ完成しておらず、設立準備室が梅田センタービルにあり、月に一度の開校準備のミーティングに通ったものです。第一回の入学試験も、校舎はできたものの内装が工事中で、阪急正雀車庫で行われたのも思い出ですね

さて、開校一年目の千里国際学園は、「稚く浮ける脂の如くして、くらげなすただよへる時」でありまして、いろいろな新しいものが生み出されました。ここでは私は、国語科代表ということなので、千里国際学園で使われている言葉の語源などを少々。

はじめに略称系の言葉から。まず、アンスケ、これはUnscheduled Timeの略なのでわかりやすいのですが、当初本学園が採用していたコロンビアシステムという時間割のシステムのころからの言葉です。次は、クラレブ、これは所謂、学級委員・級長のことなのですが、生徒会の組織を作り上げる際に、二期生である斎藤先生のご息が考案した言葉です。Class Representativesの略ですね。さて、次に国語科最大のなぞ(笑)、チャーリーです。この言葉ができたのは、ちょうど15年前の今頃です。新しい学校の国語科を考えるために、当時の国語科のメンバー3人(今は、8人!)が月に一度の会合で話し合いを進めていたわけですが、帰国生徒が多い事情を考えて、漢字を正しく身につけて貰うために、毎週、漢字の小テストを行うことになりました。今は校長になっている某先生(笑)は、実は国語の先生だったのですが、「漢字テストじゃ、堅いよなあ」と仰り、たまたま手元にあった三和銀行の通帳にPeanutsが印刷されていたのを目をとめられました。「スヌーピーはどうだろ?」「え、それじゃあまりに露骨じゃないですか?」「じゃあ、隣のチャーリー・ブラウンだ。長いな、チャーリー!これで行こう、毎週チャーリー!」「はあ」というわけで、爾来、本校の漢字テストはチャーリーと呼ばれることになったのです。

学期完結制が導入されてからは、四限目と五限目が続けてアンスケの場合、ダブルランチ(Double Lunch)といった新しい千里国際語も生まれているようです。5年後、10年後、千里にはどんな新しい言葉が生まれているのでしょうか?興味深く観察していきたいと思っています。そして、こういった学園初期の出来事を語り継いでゆくのも、はじめからいた者のつとめかとも思っておる次第です。

**保護者会ホームページご覧頂いてますか?  
<http://www.sispa.jp>**

昨年度より開設したホームページ。保護者会からのお知らせを随時掲載中です。また、今年度からはメール配信サービスも開始。最新ニュースにいち早くアクセスできるようになりました。まだ登録されていない方は、是非ホームページからお申し込みください。また、既に受信登録済みの方で、メールアドレスに変更があった場合には、速やかに登録の変更をお願いいたします。お問合せはpr@sispa.jp まで



## 10～11月行事予定

月	日	曜	
10	12	水	秋季リサイタル 午後4:00
	13	木	授業参観日
	17～18		イヤーズブック個人写真撮影日
	19～23		APACテニス(上海) バレー(ソウル) 野球(上海)
	22	土	学校説明会 午後2:45 (P.25に詳細)
	28～29		中等部3年生学年旅行
11	31～04		玄関コンサート
	10～13		APIクロスカントリー(グアム) (P.30に詳細)
	12	土	学校説明会 午前10:00 (P.25に詳細)
	16～20		APAC音楽祭合唱(マニラ) オーケストラ(北京)
	19	土	インターナショナルフェア

### 図書館より編入生の保護者の皆さんへ

図書館は学校の授業のある日はいつも、朝の8時から夕方4時30分までずっと開館していますので、保護者の方も機会がありましたらいつでも訪問してください。保護者の方も登録すれば、本を借りる事もできます。利用規則は生徒と同じで、生徒の利用に支障が出ない範囲に限られます。詳しくはお気軽に図書館までお問い合わせください。

(青山比呂乃)

### 編集後記

インターカルチャは"Page Maker"というDTP(Desktop Publishing)ソフトで作成しています。これを使いこなすのは初心者には時間がかかるので、これまで「保護者会だより」もその文章だけをいただいて私がまとめて編集をしていました。委員の方は毎年メンバーが交代になるので、毎年教えるより自分で編集するほうが早いというのが大きな理由です。しかし、嬉しいことに今号から保護者会広報委員の方で編集までしていただくことになりました。"Page Maker"に果敢にアタックしようという方が現れたからです。今回私からほとんどお教えしていないのに、これだけの仕事をしてくれました。その熱意に感服しています。吉崎さん、お疲れ様でした。私が編集したのは32ページ、合わせて40ページの大作です。ごゆっくりお読みください。(馬場博史)

夏休みが終わり、学園に賑やかさが戻ってきました。今号の夏の活動報告では、皆、それぞれの充実した夏を過ごせたようです。この夏、私はといえば、虫好きの長男に付き合っ、蝉捕り、虫捕り、昆虫館と虫三昧でした。彩都の里山も生き物の宝庫。「次はいつ行くの」とせがまれています。秋は、どんな虫たちがいるのかな。(志垣満理)

インターカルチャへの記事・ご感想等は、e-mailで [hbaba@senri.ed.jp](mailto:hbaba@senri.ed.jp) までお送り下さい。インターカルチャはバックナンバーも含めて本学園ホームページ [www.senri.ed.jp/interculture](http://www.senri.ed.jp/interculture) でもご覧いただけます。また広報センター担当の学園ホームページにつきましてのご意見・ご感想などもお待ちしております。

編集：SIS広報センター 保護者会だより記事：保護者会広報委員 カット：イラストレーションクラブ生徒

Senri International School Foundation (SISF)  
 Senri International School (SIS)  
 Osaka International School (OIS)  
 4-4-16, Onohara-Nishi, Minoh-shi, Osaka 562-0032, JAPAN  
 TEL 072-727-5050 FAX 072-727-5055

学校法人千里国際学園(SISF)  
 千里国際学園中等部・高等部(SIS)  
 大阪インターナショナルスクール(OIS)  
 〒562-0032 大阪府箕面市小野原西4丁目4番16号  
 電話072-727-5050 FAX 072-727-5055

### 年間発行予定と主な内容 ( )は発行時期

**春学期5月号(上旬)** 卒業式、入学式、大学等合格状況  
**6月号(中旬)** 学園祭、教育実習  
**秋学期10月号(上旬)** 夏の宿泊行事、夏の諸活動報告  
**11月号(中旬)** 運動会、玄関コンサート  
**冬学期2月号(上旬)** オールスクール「ワクショ」  
**3月号(中旬)** 入試結果、卒業生へ贈る言葉  
 他に留学報告、スポーツ結果、各種表彰、授業紹介、生徒会・クラブ活動等

千里国際学園は、帰国生徒を中心に一般日本人生徒や日本の教育を希望する外国人生徒も受け入れて日本の普通教育を行う千里国際学園中等部・高等部 Senri International School (SIS) と、4歳から18歳までの主に外国人児童生徒を対象とする大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS) とを、同一敷地・校舎内に併設しています。

両校は一部の授業や学校行事・クラブ活動・生徒会活動等を合同で行っています。チームスポーツはこの2校で1チームを編成しており、APAC(Asia Pacific Activities Conference)の公式試合や、近隣のインターナショナルスクール、日本の中学・高校との交流試合等に参加しています。このため、校内ではインターナショナルスクールの学校系統に合わせて、6年生～8年生(日本の小学6年生～中学3年生春学期)をミドルスクール(MS)、9年生～12年生(日本の中学3年生秋学期～高校3年生)をハイスクール(HS)と呼んでいます。